42337
教科書文庫
4
810
42-1936
2000.0
79810

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

4b
810
昭11

女子國分教科書

第三版　巻三

資料室

濟定檢省部文
昭和十一年二月五日　高等女學校國語科教科書

女子國文新編

第三版

東京高等師範學校教授
垣内松三編

46
810
昭11

一　國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

広島大学
教
79810
図書

目次（巻二）

一　月見草……阿部次郎……四
二　蟲の音……沼波瓊音……七
三　靖國社頭に立ちて……多門二郎……一一
四　翼……吉江喬松……一四
五　溪をおもふ……若山牧水……二〇
六　小鹿の家……鶴見祐輔……二八
七　野菊……島木赤彥……四四
八　三人の時計……長與善郎……四六
九　雲萍雜志抄……柳澤淇園……五四
一〇　茶話……薄田泣菫……五七
一一　日章旗……（日の丸由來記）……六二
一二　明治天皇の御遺物を拜す……笠井信一……七二
一三　心の置處……山本有三……八四
一四　樂訓……貝原益軒……八九
一五　伊勢參宮……五十嵐力……九三
一六　冬の日……河井醉茗……九八
一七　人生の急所……羽仁もと子……一〇〇
一八　近江聖人の幼時……村井弦齋……一〇七
一九　幸福……穗積重遠……一一五
二〇　歌御會始……千葉胤明……一一九
二一　盲坑夫……下位春吉……一二四
二二　茶の間……島崎藤村……一三五
二三　至誠……小林一郎……一四七
二四　櫻井驛……松居松翁……一五五
二五　國史に還れ……德富蘇峯……一六八

附錄　語釋

字音假名遣一覽

一月見草

阿部次郎

月見草は私の好きな花の一つである。取離していふと、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してはゐないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、またその花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草の仄かな黄色をいひがたく懷かしいものに思はせる。

自分は或夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗い中に、狹苦しく滿員になつてゐる旅亭を出て、同宿のI君やM君と新舊兩街の間の野原を歩いた。月見草が曉近いので、いくらか萎れかゝつて、限りもなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉すくなに並んで歩きながら、なんともいへず親しい氣持になつて、やがて旅亭に歸つた。

今自分の家の庭にも一株の月見草がある。或日の夕暮、私はこの花の咲くところを眼のあたり見た。食後二階の欄干に凭つてゐると、その蕾の急に膨らんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開くのを見て、悟を開いたといふ話を仄かに想ひ起しながら、急いで庭に出て、その花の傍にしやがんで見て居ると、いかにも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退を始める。萼が開くと、卷いてゐた花瓣が次第に膨らんで來て、不意にその一片が急にはじける。さうすると四つの花瓣が一緒にふうはりと開いて來て、遂に蘂を見せて咲いてしまふ。その咲

阿部次郎 東北帝國大學教授。明治十六年生。

「仄かな黄色をいひがたく懷かしいものに」

輕井澤 長野縣北佐久郡の町。

「山の霧が廣く流れてゐた」

「言葉すくなに並んで歩きながら」

きはじめに、仄かな香氣が鮮かに鼻を撲つ時の氣持は、なんともいはれない。明日の朝になれば、凋んでしまふはかない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、もとより悟は開けない。悟は開けないが、しかし新しく咲く花を見守る靜かな愛の心は、實に嬉しく有難いものである。（北郊雜記）

靜寂は何の物音もないといふ事ではない。沁みつくやうに靜かな周圍の中に一ひらの木の葉の落ちる音は一層その靜寂を深くし、眞夜中の犬の遠吠は寂しい眞夜中を更に寂しくする。

（阿部次郎）

＊撲つ

「咲く時の新しさ」

「靜かな愛の心」

蟲の音

沼波瓊音

私は一年の中で秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きて居るのか。」と問はれれば、「秋を味はふのが生存の一つの目的である。」と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる、その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戰爭に飽きて發心した心持にでも喩へようか。とにかく細かく優しく、そして澄んだ感じである。

沼波瓊音 名は武夫。第一高等學校教授。昭和二年歿、年五十一。

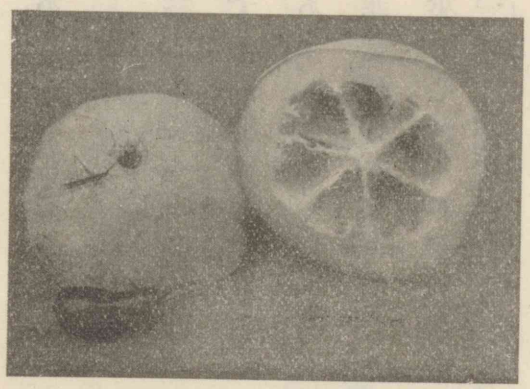
「生存の一つの目的である」

＊發心

「とにかく細かく優しく、そして澄んだ感じである」

かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光・月光・雲・草花など、それらのものにもこの心持は著しく現れてゐる。匂でいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音、そのすべてに、前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろいろな小鳥が啼くし、夏の盛りには蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも



蟲

「何物にでも現れてゐる」

「蟲の音に最も」

較べられるが、蛙の聲は單調で、卑俗で、蟲の音ほど複雜な優美な感じを起させない。其の點に於て蟲の音は最も優等で、前に述べた秋の感じなり味はひなりを一番深く現してゐる。小鳥の聲だとか蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと、心の眼が內に向つて開くやうな氣持がする。

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴初める。それも好い。秋に入つて月夜に鳴くのも好い。闇夜に鳴くのも好く、また聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ〴〵異なつた情趣があつて、いづれも好い。殊に夜汽車にでも乘つて行くと、或淋

「心の眼が內に向つて開くやうな氣持がする」

土用　夏の土用ないつた。小暑の後十三日（七月二十日頃）より立秋に至る十八日間の稱。

＊好い

＊趣がある

＊情趣があつて

しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅の哀れも一入覺えられて、深い味はひがする。また夜の銀座の明かるい賑やかな通を歩いてゐて、一寸細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋、毎晩蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づくと、堪らなく寂寥を覺えるものである。

（しら椿）

此の宵はこほろぎ近し厨なる笊の葉などに
居てか鳴くらむ　（長塚節）

わが採れる紗の燈籠に草色の袖をひろげて
來る蟷螂　（與謝野晶子）

＊深い味はひがする　**銀座**　東京市京橋區にある大通り。

＊趣が更に深い

「全くなんの音も入らないのに氣づくと」

長塚節　歌人。小説家。大正四年歿、年三十七。

與謝野晶子　歌人。明治十一年生。

三　靖國社頭に立ちて

多門二郎

昭憲皇太后の御歌

神垣に涙手向けて拜むらしかへるを待ちし親も
妻子も

を拜誦するにつけても、亡き戰友のことどもを思ひ起し、感激の涙に堪へないのであります。

私は日露戰爭には一小隊長として、鴨綠江の戰鬪を始め、遼陽・沙河・奉天と大小十數回の戰鬪に參加し、負傷もしましたが、最後まで從軍しました。思へばこの間、多くの戰死者と戰場で別れましたが、いづれも皆、九段の御社に祀られ、護國の神と

多門二郎　陸軍中將。昭和九年歿、年五十七。

昭憲皇太后　明治天皇皇后宮。大正三年崩御、御年六十五。

＊手向け

「感激の涙に堪へない」

鴨綠江　朝鮮の西北境。我が國第一の大河。

遼陽　滿洲國奉天省の中部の都邑。

沙河　奉天省に在る河。太子河の支流。

「護國の神」

仰がれて居る事を思ひ、自ら慰めて居るのであります。私の初陣は鴨綠江でありました。其の後、遼陽の戰には弓張嶺の夜襲に加はりましたが、僅か三十分で部下小隊の半ばを失ひ、中隊は一軍曹の指揮に委ねなければならなかつたのでした。當時の日記を見ると、

「私等の中隊は、忍び〳〵て愈〻敵前まぢかに接近した。もうよからうと、私は軍刀を拔くと同時に『突込めッ』と一聲高く叫んで走り出した。『わーッ』と云ふ突貫の聲と共に、隊が隨いて來る。其の以前に、私の右には第二小隊長飯野少尉が進むのを、かすかに見た。其の他は何ものも見なかつた。私が軍刀を振りかざして飛びこむ途端に、露兵の銃劍がずらつと竝んで居た。夢中で軍刀を打ちおろす。何でも、人

*初陣

「當時の日記」

の頭か石かに斬りつけたと思つた拍子に、露兵の散兵壕の底にころげ落ちた。轉がつたが、直ぐ起上つた。そして横に居つた敵に斬りつけた。敵は轉がりながら逃げた。すると、横から二人許りの露兵が突いて來る。軍刀で拂ひ飛ばす。さうすると、一度後へさがつて、一發擊つと同時に又突きだした。其の時、大勢どつと飛込んで來た。私が眞先に獨り突入したので、直ぐ後から飛込んで來たのである。此の一團のために私は突飛ばされて、壕底の縁を踏みはづし、『しまつた』と思ふ間もなく、敵方の斜面にごろ〳〵落ちる。私の兩側一帶の敵は、此の勢に辟易して遁げるのか、或は私と同樣に、私の小隊のものが飛込んだ拍子に突飛ばされたのか、たくさん轉げ落ちつゝある。私も此の露兵のな

*散兵壕

*辟易

かに一緒に混つて落ちたが、どうしても止らない。石塊が多いのと斜面が急なので、遂に五六米落ちて、辛うじて止つた。途中で小さな木に衝突したはずみに軍刀を落した。直ぐに腰の邊りを探した。『あッ、失敗つた。』短銃は、生意氣に不要だと思つて、先刻、集合地で背嚢の中へ仕舞ひ込んで置いて來た。もう夜は明けかゝつて、一米も近寄れば顏が見える。無論將校たる標識として私の左腕に附けて居る白布は判然とわかる。無手では仕方がない。『これで殺されるのかな。』と思ひながら、兎に角出來るだけ這ひあがらうとして居ると、私の兩側に止つた露兵が、私を見付けて同時に突込んで來た。ちやうど四つ這ひになつて居る所で、運好くも兩方の劍は、右と左の中指の尖端を擦つて、砂利に

*標識

「止つた」

ぐさと突きこむ。之と同時に上の方から、露兵か日本兵か知らぬが、轉がつて來て、右側の露兵に突きあたつた。其の勢で、此の露兵は下へ轉がつて行つた。もう左側の敵だけだと思うて見ると、之は銃劍だけ其の儘にして、私を突くと同時に遁げたのか、突く時の勢で、斜面の急なために倒れて轉げ落ちたのか、もう影がない。

先づ助かつたと思うて、早くもとの散兵壕まで戻らうと這上つたが、身體が疲れて、如何に一所懸命になつても容易に登れない。氣が揉めてならぬが、身體が利かぬので仕方がない。此の時又、上の方から日本兵が一名飛込んで轉がつて行く。おい〳〵、おい〳〵と叫んだが、下へ落ちて終つた。高橋上等兵らしい。すると上の方で、上等兵時田茂吉

の聲で、『小隊長殿、小隊長殿。』と呼ぶ。『此處だ〳〵。』と答へると、勢ひ込んで下りて來た爲に、哀れ上等兵は、私の所で止ることが出來ずに、ずん〳〵轉げて行く。『時田、時田』と呼んだが、返事もせずに轉げ落ちる。可哀相な事だと思ふのみで、今は私も途方に暮れた。又二歩許り四つ這ひになつて登り始めると、上で『中尉殿、中尉殿。』と言ふ聲がする。『太田か、此處だ。早く來い。』と私が叫ぶ。從卒の太田榮三は、『あ、其處ですか。』と言ひながら下りるやうである……。」と書いてあります。

私は、太田從卒の拾つて呉れた軍刀を再び手にしました。從卒は左手に私を引つ張り、右手に追ひすがる敵を突飛ばしつゝ、もとの占領した壕に歸り、直ぐあとより押しよせて來た

敵の逆襲を邀へて、再び激しい接戰となりました。私は腑甲斐ない小隊長でありましたが、下士卒は、何れ劣らず壯烈なるかけ聲と共に、劍戟の凄まじい音を立て、火花を散らして奮鬪しましたのは、二十年後の今なほ、目に見ゆるやうです。

大正九年春、津野將軍の隷下に屬し、諸兵連合の一隊を指揮し、沿海州のデカストリー灣に上陸して、五月下旬、雪融けの滿滿たる黑龍江を下航して、尼港の同胞救援に向ひ、六月三日同地を占領しましたが、時既に遲く、遂に日本人の一人だも救援する事が出來なかつたのは、衷心慚愧の至りに堪へませぬ。此の占領と同時に、餘燼なほ炎々たる中を潛り、軍隊の大部は敵を各方面に追擊し、一部のものは燒き盡くされたる尼港の

＊逆襲

「今なほ、目に見ゆるやうです」

津野將軍　陸軍大將津野一輔。

デカストリー灣　尼港の南方間宮海峽に面した港。

尼港　ニコライエフスク。黑龍江の河口に近くある開港場。

＊餘燼

市街を隈なく探し、生殘者が一人でも何處にか潛んで居りはせぬか、遺留品の一片もがなと、一同血眼で調べました。其の時に尼港監獄のはき溜の中から、日本兵の通信手工兵一等卒香田昌三の手帳を發見し、取る手遲しと之を讀みまして、非常に驚きました。何故ならば、數十日間杳として消息不明であつた尼港の狀況は、此の日記に依つて、明瞭となつたからであります。

通信兵は隨分忙しい職務で、戰時は不眠不休の勤務をなすものでありますが、此の香田一等卒は、其の多忙なる間に、初からの模樣を事細かに記載してをります。

「三月十一日、赤衞軍參謀長ハ我ガ本部ニ來リ、日本軍ノ武器・彈藥ヲ借入レ度キ旨申込ミ、若シ應ゼザレバ武力ヲ以テ借

*杳
「日記に依つて、明瞭となつた」
「不眠不休の勤務」

受クル旨、其ノ返答ヲ十二日正午迄ニナスベキ旨傳ヘ去ル。依テ我ガ軍ニ於テハ十二日午前二時ヲ期シ、敵ヲ襲フベク計畫成ル。勿論決死ノ目的ナリ。

其ノ夜襲ハ、大略次ノ如シ。

石川大隊長ハ六十餘名ヲ以テ、敵ノ本部ヲ包圍攻擊スル豫備隊トシテ、水上大尉ハ二ケ小隊ヲ以テ、敵本部ヲ包圍スベク、後藤大尉ハ二ケ小隊ヲ以テ、共ニ敵本部ヲ包圍シ、先ヅ機關銃・小銃ヲ以テ攻擊スルト共ニ火ヲ點ジ、火災ヲ起サシム。敵ハ時ノ過グルニ從ヒ、各所ヨリ現レ戰フ。我ガ軍ハ第十一中隊トノ連絡ヲナス能ハズ、加フルニ大隊長始メ窪田大尉、副官・軍醫等、大隊長ノ指揮スル隊殆ド敵彈ニ斃ル……。」

かう云ふ樣な書方で、又別に通信日記と云ふのがありまし

て、自分の任務と同僚の事などを細かに述べて居るので御座います。十三日の通信日記には、次の様に書いてあります。

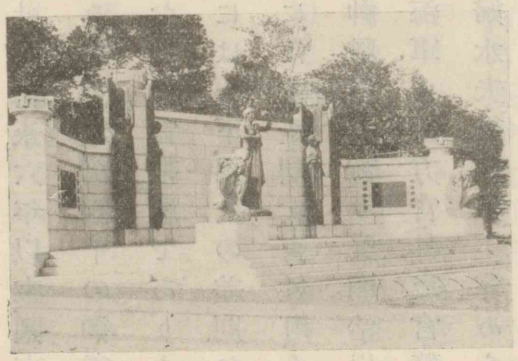
「山根一等卒ハ中途ニ於テ水上大尉ノ率ヰル一隊ニ加ハリ、奮戰ノ後本部ニ引揚ゲントスル際、敵ノ一齊射撃ヲ受ケ、名譽ノ戰死ヲ遂グ。之午前四時半ナリキ。

此ノ時、本部ハ敵ノ包圍ヲ受ケ、砲・小銃ノ猛射ヲ受ケ、危機ニ迫ル。加フルニ人員・糧食少ナク、亦防備不完全ナルニ付、中隊引揚ニ決ス。香田一等卒ハ電報原書・通信書類・電話機其ノ他ノ兵器ヲ燒却シ、現字機ヲ破壞ノ後、消耗品・被服ニ火ヲ點ジ、高田主計以下十八名ト共ニ中隊ニ引揚グ。時ニ午後八時ナリ……。」

此の日、バルチザンから日本兵營を攻撃せられて、大隊本部

*燒却

の防禦困難のなかに、敵に證據品や利用品を與へざる處置を完全に遂行した沈着剛膽の有様が、能く現れて居ります。私は香田一等卒が孤立無援、重圍の中に在つて、敵彈を物陰に避けながら、覺束ない蠟燭の灯かげに、殘り少なの鉛筆を走らす可憐の姿を想像して、感激を禁じ得ないのであります。そして九段坂上なる尼港殉難者の記念碑を仰ぎ見るたびに、いつでも此の兵卒の事を思ひ出すのであります。世に軍神と仰がるゝ將校もありますが、又それ〴〵分に應じてその任務を遂行し、從容として國難に殉じたる多數の隱れたる勇者



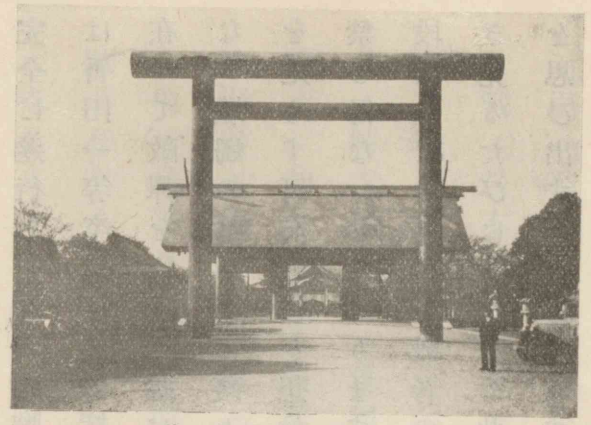
東京九段坂上　尼港殉難者記念碑

*遂行
「沈着剛膽の有様」

「感激を禁じ得ないのであります」

*從容

あることを思ひ、社頭に立ちて感慨一層深きものがあります。



靖國神社

靖國神社は嘉永六年以來、國事に斃れたる約十二萬四千の御靈を合祀した別格官幣社であります。祭神には上下、男女の差別なく、維新前には志士・烈女・百姓・町人・公卿・藩主・神職・僧尼あり、又明治以後には、陸海軍人・地方官・外交官・警察官・看護婦・水夫・從僕・職工等、あらゆる職業の人々を網羅し、朝鮮に於ける同胞も既に十一柱合祀せられてあります。一言にしていへば、階級を超越して、義勇奉公の全國民的精神を祀つたのであります。故に外國の貴顯・使節等の御來朝の節は、必ず之に參拜すること、恰も英吉利・佛蘭西・白耳義・伊太利等に於ける無名戰士の墓や、亞米利加に於けるアーリントンの墓地と同樣であります。是等の諸國にては、それ〴〵其の記念日を國家の祭日と定め、公私の儀式を行ひ、以て國民精神の振作に努めて居ります。

今靖國社頭に立ちて亡き戰友の功績を偲び、國家のために神靈の加護を祈れば、莊嚴の氣そゞろに身に迫るのを覺ゆるのであります。

（ラヂオ講演による）

「感慨一層深きもの」

嘉永六年　孝明天皇の御代。（一八五三）

別格官幣社　功臣を祀る社格。

＊網羅

＊階級を超越「全國民的精神」

アーリントン　Arlington. ワシントンの郊外。

「國民精神の振作」

四　翼

吉江喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄切つた秋の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星がぴかぴか光つてゐた。

私は丘の上の草の中へ腰をおろして、じつとして居た。すうつ、すうつと草の葉が擦合つて、下の野の方からは蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、椋の樹の葉の落ちた枝が細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音が

吉江喬松　文學博士。早稲田大學教授。明治十三年生。

「丘の上に立つてゐた」

「草の中に腰をおろす」

「その光を掴むやうにしてゐた」

「空氣を切つて飛ぶ

する。はつと思つて私は頸をすくめて見上げた。はつきり見極められないが、薄黑い鳥の影が列をなして行くのが目にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。

空氣が搖れて、顏へ、頸へ、冷たく當る。〳〵と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀ぢう波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臟の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは調子を合はせて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ〳〵と移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて搖れた。

物音がする」

「胸の動悸が高く打ちだした」

「物音の中心」

「波動」

黑い空氣の波の震動、私の心臟もその中につゝまれて、ゆるく波動を立ててゐた。

ぽうつと野は明かるくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上へ敷かれて、蟲はいま目を醒ましたやうに爭つて聲を立てた。

私は月の方へ向つて、胸へ深く光を吸ひ込んだ。

月の光の下に、瓦の屋根の竝んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黑く見えてゐるばかりで、燒け跡か何かのやうだ。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明かるくなつて、藪蔭がぽつり〳〵立つてゐるのが見えた。顫へるやうな水溜も見えた。光の波が今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中迄もその波がくゞり入つて、體軀全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつと、また物音が空に聞える。私はまたはつと思ふと、動悸が打ちだした、何物かの襲來を受けたやうに。頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十

「空氣の波の震動」
「野は明かるくなつた」
「光を吸ひ込んだ」
「都會が見えだして來た」
「光の波が……漲り溢れてゐた」
「其の波がくゞり入つて」
「さあつ、さあつと、また物音が空に聞える」
* 掠めて
* 視線
「雁の群」

羽ばかりの雁が横に並んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて、勢好く舞つて行く。

群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞ひ行く鳥の影が草原の上を斜に流れて行くのが見える。

月と雁

野の果の低い空には、大きな星が澄んだ光できら〳〵してゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖しさと不思議さに、思はず聲を立てようとした。我が生

「草原の上を斜に流れて行く」

「我が生が、形の異な

が、形の異なつた、羽を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周圍が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが空にも地にも充ちてゐるやうな氣がした。

暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黑いものがずん〳〵空を流れて行くやうだ。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に奇妙なリズムを響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原はまたひつそりして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた。（若き自然）

つた、羽をもつた我が生が、いま目の前を翔つて行く」

「光の波を搔亂し」

リズム Rhythm. 韻律。

「ひつそり」

五　溪をおもふ

紀行文と歌

若山牧水

溪のことを書かうとして心を澄ましてゐると、さま〴〵の記憶がさま〴〵の背景を負うて浮かんで來る。

秋のよく晴れた日であつた。ほつかりした氣になつて、池袋停車場から出る武藏野線の汽車に乘つた。廣々した野原へ出て、思ふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、そこらの野原を少し歩いてゐるうちに、野末に近く見えてゐる低い山の姿をみると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つて、その線路の終點驛飯能まで行つた。

若山牧水　名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十五。

＊背景

池袋　東京市豐島區。

武藏野線　池袋・飯能間の鐵道。現在の武藏野電車。

「是非その麓まで行きたくなり」

飯能　埼玉縣入間郡の町。現在は中間驛。

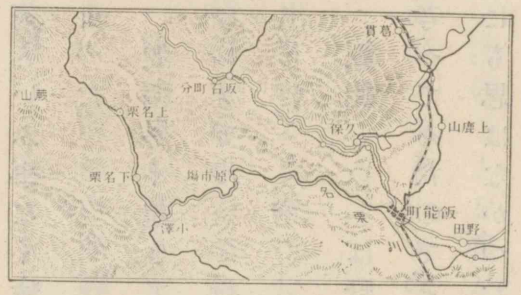
着いた時はもう日暮で、引返すとすると、非常にあわたゞしい氣持でその日の終列車に乘らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてゐたので、とう〳〵そこに泊つてしまつた。

翌朝早く起きて散歩に出た。漸く人の起出た町を、そのはづれまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

飯能といへば、野原のはての低い丘の陰にある町だとのみ考へてゐたので、そこに見事な溪が流れてゐようなどとは夢にも思はなかつたのである。少なからず驚いた私は、あわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂、洗はれた巖、その間を澄みとほつた水が淺く深く流れてゐる。

「思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した」

昨夜來の疲れをも悉く忘れ果て、急いで宿屋へかへつて朝飯をしまふなり、私はまたすぐ引返して、すつかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。



名栗川附近

溪をはさんだ紅葉も深く、諸所に植ゑこんだ大きな杉の林もあつた。

細長い筏を流す人たちにも出會つた。

ゆる〳〵と歩いて、その日は原市場で泊り、翌日は名栗まで、その翌日長い峠にかゝるとともに、その溪はいよ〳〵細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと、そこにはまた新たな溪が流れ出してゐた。

「急いで…山際の路を上つて行つた」

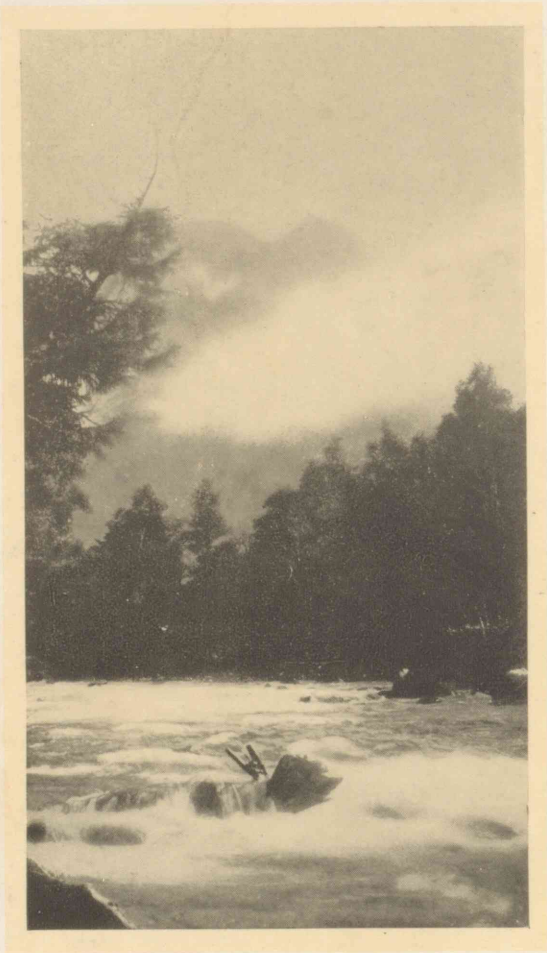
「筏を流す人たちにも」

原市場　埼玉縣入間郡の村。

名栗　同前。

「終には路とも別れてしまつた」

「新たな溪流」



溪に沿うて

朝山の日を負ひたれば溪の音冴えこもりつゝ霧たちわたる

鶺鴒來てもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩かげの淵に

おどろ〳〵とどろく音のなかにゐてまむかひにみる岩かげの瀧

淺瀨石川といふのは、津輕の平野を越えて日本海の十三潟に注ぐ岩木川の上流の一つである。そこきりで鱒の上るのが止るといふ荒い瀨のつゞく邊に、板留といふ小さな溫泉場がある。

溫泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二箇所と、その根がた

淺瀨石川 一名黑石川。青森縣南津輕郡。

津輕平野 青森縣の西部にあり。岩木川の流域。

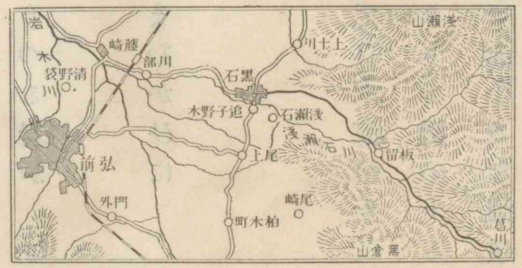
十三潟 津輕半島の西岸に灣入せる潟。

岩木川 岩木山の西南麓に發し、十三潟に注ぐ。

の川原に接した所に一箇所と、一二丁づつの間隔を置いて湧いて居る。

私の好んで入つたのはその斷崖の根の溫泉で、入口には蓆が垂らしてあるばかり、板の壁はあらかた破れて、湯の中からでさへ溪の瀨がよく見える。

或日の午後、ぼんやりとひとりで浸つてゐると、次第に湯がぬるんで來た。氣がつくと、板壁の根の方から溪の水がひそかに流れ込んで來てゐるのである。四月の廿日前後であつたが、その日あたりから急に雪が解け始めたらしく、溪の水の濁つて來るのは判つてゐたが、かう急に增さうとは思はなかつた。呆氣にとられて、裸體のまゝ小屋の外に出てみると、赤黑く濁つた水が、ほんの僅かの間に全く川原を浸して流れて居る。丁度そこの對岸の木立のなかに——そのあたりにも水が流れ及んでゐた——網を提げた男が一人、あちこちと歩いてゐる。雪解を待つて鱒は上つて來るといふ事を聞いてゐたが、彼は今それを狙つてゐるのらしい。やがて、また一人あらはれた。



淺瀨石川附近

「ぼんやりとひとりで浸つてゐると」

溪流

雪が解けそめたとはいへ、四邊の山は勿論、ついその川岸か

「ほんの僅かの間に」

＊呆氣にとられ

ら、まだ眞白に積渡してをるのである。その雪と、濁つた激しい溪水と、珍しく青めいたその日の日光との中に、默々として動いてゐるこの鱒とりの人たちが、いかにも寂しいものに私の眼には映つた。

雪解水岸にあふれてするかすむ淺瀨石川の鱒とりのむれ

むら山の峽より見ゆるしらゆきの岩木が峯に霞たなびく

みなかみへ、みなかみへと急ぐこゝろ、われとわが寂しさを嚙みしめるやうな心に引かれて、私はあの利根川のずつと上流僅か一足で跳渡ることの出來るやうに細まつた所までわけ上つたことがある。

狹い兩岸には、もうほの白く雪が來てゐた。斷崖のかげの落葉を敷いて、ちよろ〳〵、ちよろ〳〵と流れてゆく、その氷のやうに滑かな水を見、まだらな新しい雪を眺めた時、何ともいへぬ心に、私は身じろぎすら出來なかつたことを覺えてゐる。今思ひ出しても、神の前にひざまづくやうな有りがたい尊い心になる。（著しかつた筒）

水のまぼろし、溪のおもかげ、それは實に私の心が正しくある時、靜かに澄んだ時、必ずのやうに心の底にあらはれて、私に孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる。（靜かなる旅を行きつゝ）

「いかにも寂しいものに私の目には映つた」

＊雪解水

岩木が峯　一名津輕富士。弘前市の西北十二粁。熄火山。高さ一五九〇米。

「わが寂しさを嚙みしめるやうな心」

利根川　源を群馬縣に發し、關東地方の中部を東に流れ、銚子に至つて太平洋に注ぐ。

「僅か一足で跳渡る」

「私は身じろぎすら出來なかつた」

「水のまぼろし、溪のおもかげ……孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる」

六 小鹿の家

鶴見祐輔

ある晩、いつものやうに長い夜話をした後で、

「明朝、私が面白いことをしますから、皆さんお立合ひください。午前十時ですよ。」

メーヨーさんが、輝いた眸を睜りながらさう言つた。一同が、それを合圖に立上つた。

「グードーナイト。」

婦人たちが先に、部屋を出ていつた。

そのあくる日の十時、みんなが揃つて、メーヨーさんの後について、花壇の傍を過ぎて、牛小舎の彼方の、杜の傍の白く塗つた平家建の家に這入つていつた。初秋の日射しが、雨のやうに、杜と芝生と白い家との上に降り灑いでゐた。

長方形の部屋は、五間に三間程の大きさ、床に花莚を敷き、天井は梁の見える儘の作りにしたところに、野趣が溢れてゐる。窓五つは、大きい部屋に物足らない。それが部屋を薄暗くして居る。

素朴な小机二脚、木の椅子五六脚、左手の奥には大きい煖爐があつて、その横にふくよかな長椅子一つ、室の色は黄色と黒と薄淺黄、ところどころに朱。全體の感じが、和蘭の舊都にあるやうな落ちつきを見せて、塵一つ落ちてゐない。

メーヨー夫人

鶴見祐輔 著述家。明治十八年生。

メーヨー アメリカの女流評論家。「輝いた眸を睜りながら」

グードーナイト Good night. おやすみなさい。

「和蘭の舊都にあるやうな落ちつき」

煖爐には、新しい薪が積んである。メーヨーさんがその前に坐ると、皆もそれ〴〵の椅子に腰を下した。靜かにメーヨーさんが話し出した。

「私は今日の來ることを待つてゐました。それはこの小さい家を初めて開くハウスーウォーミングをするためであります。この家には由來があります。二年前、私の友達が小鹿を一頭贈つてくれました。そこで私どもはこの小舍を建てて、此の小鹿の家にしてやりました。優しい眼を持つた可愛い生物でありました。或朝、私がいつもの通りに、餌をやらうと思つて小舍の戸を開けますと、嬉しさうに飛びついて來る彼女の影も姿も見えませんでした。ふと見渡すと、小舍の後の板戸が大きく破れて、狼藉な足跡がありました。疑ひもなく

「新しい薪」

「私は今日の來ることを待つてゐました」

ハウスーウォーミング House Warming. 新宅開きの祝。

＊狼藉

近所の猛犬が夜中忍び込んで、優しい小鹿を喰殺したのであります。その悲慘な出來事のために、私の心は深い傷を負ひました。防備なき小鹿が猛犬の牙にかゝつた夜半の光景が、どうしても私の心頭から離れませんでした。私は病氣になる程、これが可哀相に思はれました。

あくる年、私が三ケ月程旅行して此處に歸つて來ますと、何時の間にか小鹿の小舍が、こんなさつぱりした書齋になつてゐました。それはモーカが、私の留守に造りかへてくれたのです。そこで私は考へました。可憐な小鹿の魂を、どうかよい仕事によつて記念してやりたい。その最も相應はしいことは、世界平和の事業に此の小さい家を獻げることである。私の世界平和運動の著述はみなこの家で書かう。しかしそ

「防備なき小鹿が猛犬の牙にかゝつた夜半の光景」

モーカ 人名。メーヨー女史と共同生活をしてゐる婦人。

のためには、この家開きを大勢の外國のお客と一緒にしたい。さう思つて、私は今日を待つてゐたのであります。

今お集りの方々の中には歐洲の方、東洋の方、亞米利加の方がある。宗教では、新教・天主教、それから佛教の方がある。さうして皆、國際的精神の涵養といふ事業に働いて居られる方方である。かういふ方々の手によつて、このさゝやかな家が開かれ、かゝる人々によつて永く記憶せられるといふ事でありますれば、嘸やあの小鹿の靈も嬉しく思ふでありませう。私は佛教の事は知りませんけれども、あの輪廻の説に深い懷かしみを感じます。凡ての生物に靈を認めるといふ哲理に、幼少の折から愛着の心を懷いてゐました。ですから小鹿の靈を、かうして弔つてやりたいと思ふのであります。

「今日を待つてゐたのであります」

新教 基督教の一派。ローマ舊教に反對して獨逸のルーテル等が唱へたもの。

天主教 基督教の一派。羅馬法皇を教主と仰ぐもの。

＊國際的精神の涵養

＊輪廻

こゝには英國の船に乘る若い方々も居られますが、よく今日の私の話を記憶して、全世界の港を渡つてゆかれる時に、異なる人種と、異なる生物との一切に、あなたの深い同情と理解とを持つやうなお心掛でゐて下さい。

それでは、この煖爐の薪に火を點じませう。私はこれから、名前を申しますから、その順に點火して下さい。

鶴見さん、貴下が一番先にこの火をつけて、この小鹿の家を溫めて下さい。」

自分は默つてマッチをすつた。火があかゝと煖爐に燃えた。パチ〳〵と音がして大きい薪がパッと燃上ると、薄暗い部屋の中の一同の顔は一時に明かるく輝いた。

（北米遊説記）

「深い同情と理解とを持つやうなお心掛」

「溫める」

「默つて」

「薄暗い部屋の中の一同の顔は一時に明かるく輝いた」

七　野菊

島木赤彦

野菊の花を見てゐると、
水の流れる音がする。
野菊の原のくぼたみに、
泉が湧いて居りました。

野菊の花を見てゐると、
こほろぎの鳴く聲がする。
野菊の原の草の根に、
蟲がかくれて住みました。

島木赤彦　本名久保田俊彦。歌人。大正十五年歿、年五十一。

「水の流れる音」

「こほろぎの鳴く聲」

野菊の花を見てゐたら、
雲が通つて行きました。
空に浮かんで行く雲の、
影が花野に動きます。

蟲と泉の音のする、
野菊の原はしんとして、
雲の通つた大空は、
いよ〳〵青くなりました。

（赤彦童謠集）

「影が」

「しん」

「青く」

八　三人の時計

長與善郎

甲・乙・丙の三人が或處へ行かうと思つて、その時間を相談しました。

「一時半の汽車にしよう。」

と、甲がいひました。

「よろしい。しかし今は何時だらう。」

と乙がいひました。

「一時十分前だ。」

と、自分の時計を出して見て、丙がいひました。

「君の時計は合つてゐるのか。」

と、乙が聞きました。

長與善郎　文學者。明治二十一年生。

「君の時計は合つてゐるのか」

「あゝ、僕の時計は正しい。きつちりドンに合はせたのだからだ。」

と、丙が答へました。

「いつ合はせたのだ。」

と、甲が聞きました。

「三日前だ。」

と、丙が答へました。

「それでも君の時計が後れる質(たち)なら、君の時計は、もう正しくはないだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことはない。僕は僕の時計を信ずる。」

丙はまたきつぱり、かう答へたあとで、甲に聞きました。

「正しい」

ドン　最近まで東京市に於て全市に正午を知らせるために發した砲聲の模聲語。

「信ずる」

「君の時計は何時だ。」

「一時十分過だ。」

「隨分進んでゐるね。」

と、丙が笑ひました。

「あゝ、僕の時計はあてにならない。」

と、甲がいひました。

「それでも、君は君の時計を、いつドンに合はせたのだ。」

と、乙が甲に聞きました。

「昨日だ。」

と、甲が答へました。

「昨日。それなら三日前にドンに合はせた丙の時計よりはあてになるかも知れないぢやないか。」

「あてにならない」

「うん。しかし僕には僕の時計は信じられない。なんだか違つてゐさうな氣がする。」

と、甲が俯向いて答へました。

「そんなあてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか。」

と、丙が罵つていひました。

「僕の時計に合はせ給へ。」

「君のが合つてゐるなら、君の時計に合はせよう。」

甲はかういつて、自分の時計を丙の時計に合はせました。

「君の時計は何時だ。」

丙はまた乙に聞きました。

「かつきり一時だ。」

「信じられない」

「あてにならない時計を持つてゐても、仕方がないぢやないか」

「いつドンに合はせたのだ。」

「一昨日だ。」

と、乙が答へました。

「やはり進む質だね。」

「いゝや、僕の時計はどちらかといふと、少し後れる質なのだ。だから多分は一時五分過ぐらゐだらう。」

と、乙がいひました。

「そんなことがあるものか。それは違つてゐるよ。」

と、丙が笑ひながらいひました。

「うん、少し位は違つてゐるかも知れない。併し大した違ひはない筈だ。こゝから停車場迄はどのくらゐかゝるだらう。」

「大した違ひはない。」

「二十分あれば澤山だ。だからまだゆつくりしてゐてもいい。」

と、丙がいひました。

「しかし今が一時五分過とすれば、あと二十五分しかないのだから、僕は一足先に出かけるよ。いづれ停車場で會はう。」

「一足先に出かけるよ」

乙はかういつて出て行きました。

「氣の早い奴だ。」

甲と丙とは、かういつて笑ひました。

しかしそれから暫く經つて、甲と丙とが停車場へ行つた時、乙は二人にいひました。

「汽車はもう出てしまつたよ。僕は間に合つたのだが、君達を待つてゐたのだ。」

甲と丙とは、驚いて顔を見合はせました。

「それでは、僕の時計は違つてゐたのかな。」

と、丙が顔を赤くしていひました。

「さうだ。君の時計は二十分後れてゐたのだ。僕の時計は十分後れてゐた。甲の時計があつてゐたのだ。」

「さうかなあ。」

と、甲がぼんやりしていひました。

「して見ると、君が一番利口だつたわけだね。」

「さうだ。自分を知つてゐる者が一番利口だ。時計は信じられる爲にあるものだ。信じなければ、それは何の役にも立ちはしない。間違つた時計を持つてゐて、それを信ずるのは固より悪いが、又どんな正しい時計を持つてゐても、それを信じなければ、間違つた時計を持つてゐるのと同じことだ。又何にも持たないのと同じことだ。間違つた時計を信ずる者も、正しい時計を信じない者も、なほ汽車に乗ることが出來ない。それは兩方とも馬鹿であるからだ。自分を知つて、信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出來るのだ。」

乙はかういひました。

（孔子の歸國）

「丙が顔を赤くしていひました」

「『さうかなあ』と、甲がぼんやりしていひました」

「自分を知る」

「信ずべきものを信ずる者だけが、汽車に乗ることが出來るのだ」

甲は「きっぱりものを言ひ切らない。」

乙 疑ひ深い。

丙 あくまで信ずる。

語ることの出來る人千人に對し、考へることの出來る人一人

考へることの出來る人萬人に對し、見ることの出來る人一人。

（ラスキン）

ラスキン John Ruskin. (1819—1900). 英國の文藝、藝術の批評家。

九　雲萍雜志抄

柳澤　淇園

ある人、時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、その妻之をとゞめていひけるは、「明けくれにかくる世話のみにあらず、くるひたる折からにはその隙を費し、自鳴鐘のために、かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へ。」といへば、「さあらば雞を飼ふべし。」といふに、その妻又とゞめて云ひけるは、「時刻は人のうへにあり。汐の滿干もこれとおなじかるべし。自鳴鐘・雞を便りとするは、勤に怠るもののいたすことなり。」と夫を諫め、つひに雞をも飼はずなりにき。

一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあれば、「御用心」と書きて與へぬ。しひて他のことをもとむる者あれば、「御用心々々々々」と、いくつも書き給ひ、又上に、只といふ一字をそへて、「只御用心」とかゝせ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、教訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合はせて、一字に作り書けり。その文に云ふ。

鳥渡見れば忍ぶに類し、麁忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。（用心といふ事はどんな仁間違ても大切は事である。）

天龍寺の觀道といふ僧これを見て、棄恩入無爲、眞實報恩謝」といふ文意に、何となくかよひてをかしといへり。

守邪とは、醫書の樞要にして、人の行ひにていはば、油斷せざ

柳澤淇園　名は里恭、字は公美。儒者。寶暦八年（西一八〇）歿、年五十三。

雲萍雜志　四卷。柳澤淇園著「見聞漫錄」（二十卷）中から採錄補訂せるもの。

自鳴鐘

「時刻は人のうへにあり」

一休禪師　諱は宗純。禪宗の高僧。京都大德寺の住。文明十三年（一四八一）寂、年八十八。

紫野　紫野大德寺。今京都市上京區紫野大德寺町にあり。臨濟宗大德寺派の本山。開山は大燈國師、一休は第四十六世の寺主。

「只御用心」

鳥渡　忍
麁忽　恩
はるか　思

天龍寺　京都市右京區嵯峨に在る臨濟宗天龍寺派の本山。夢窓國師の創建。

棄恩入無爲　一切の煩惱を斷つて「悟」を開くこと。

「守邪」

るなり。よろづの事も、みづからゆるす所よりして、よからぬことは出で來るなり。甚だしく寒き時は、風邪にもをかされぬものなり。寒さのゆるみたる時に邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることとゆるす時に、はや大惡のきざすもとと思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが大事の始とこそ思ふべし。古歌に、

かばかりの事は憂世の習ぞとゆるす心の果てぞ悲しき

（雲萍雜志）

心胸には道理に知れない道理がある。わたしたちは千百の事物に於て、その道理以外の道理を知る。

（パスカル）

＊邪氣に感冒する

パスカル Pascal Blaise.（1623—1662）、フランスの幾何學者哲學者。

一〇　茶話

薄田泣菫

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃、古今傳授を受けたのは彼一人だつたのでも、歌の方の造詣もほゞ察することができよう。

幽齋が頓才があつて、歌の詠み口の早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顏を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」

といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は卽座に、

「御所車通りしあとに時雨して」

薄田泣菫　名は淳介。詩人。明治十年生。

細川幽齋　名は藤孝。慶長十五年（一六一〇）歿、年七十七。

＊通曉「古今傳授を受けたのは彼一人」

＊造詣

三齋　細川忠興の號。正保二年（一六四五）歿、年八十二。

烏丸家　藤原光廣をいふ。寛永十五年（一六三八）歿、年六十。

「卽座に」

＊御所車

とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひして歸らうとすると、烏丸殿はわざ〳〵玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打をしてだしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突倒させた。そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まご〳〵してゐる間に、

「細川殿たつた今、一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。

すると、幽齋は腰を擦り〳〵起きあがりさま、

「とんとつくころりと轉ぶ幽齋がいつの間よりか歌をよむべき」

と歌つたので、惡戲なお公家さんも手を拍つて嘆賞するより

*式臺

*所望

「起きあがりさま」

ほかに仕方がなかつた。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうちに「ひ」の字を十入れて作つてほしいと、難題をいひ出した。

幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

「日の本の肥後の火川の火打石日々にひとふたひろふ人々」

と、詠んでみせた。大名はこりずに、また〳〵難題を出して、今度は歌一首のなかに「木」を十本詠込んでみてほしいといひ出した。箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の造作もなく、有合はせの楢と櫟と桐と柿と椎と松と杉と柚と桑とを詠込んで見せたものだ。

「何の苦もなく」

「何の造作もなく」

櫟　七葉樹科の落葉喬木。一〇—三〇米の高さ。

楢　葉繁き故の名と

すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに、首を捻つて感心してしまつたといふことだ。

歌の話が出たから、これは幽齋ではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑が、ある時さるお公家さまを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした。それは歌のどんな上の句にでも、くつ附けることの出來る下の句だと、出來ることなら農商務省に願ひ出て專賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がどんな句だと訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺をよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

といつて、「それにつけても金の欲しさよ」といふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつ附けてみた。ところが妙なことには、この下の句はどの歌にもよく附いて、少しの縫目がみえなかつた。

「それにつけても金の欲しさよ。」

實際よく附くと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

（茶話全集）

いふ。木蘭科の有毒常綠灌木。高さ約三米。

山崎宗鑑 天文二十二年（一五五三）歿、年八十九。

農商務省 大正十四年農林省と商工省に分る。

＊專賣特許

「鼻の上に皺をよせて笑つた」

＊趣向

古今集 古今和歌集。二十卷。我が國最初の勅撰和歌集。

百人一首 天智天皇より順德天皇に至る百人の歌人の歌一首づつを撰び集めたもの。

「少しの縫目がみえなかつた」

「金が欲しくて仕方がなかつたのだから」

二 日章旗

日の丸の旗が、始めて民間で用ひられたのは、明治五年九月十二日、東京・横濱間に當時陸蒸汽といはれた鐵道が開通した日からであると傳へられて居る。

その日、かしこくも明治天皇には親しく横濱驛に成らせられ、沿道の人々は手に日の丸の小旗を持ち、各戸には一齊に日の丸の旗がひるがへつたのである。太政官からは、豫め「聖意を奉戴してなるべく質素にお迎へするやう」といふ注意があつたので、横濱市民はいろ〳〵と奉迎の方法に就いて頭をいため、度々寄合つて協議をこらしたものである。その中に誰かが「西洋では、祝日や祭日にはよく國旗を掲げるといふから、それにならつて、日の丸の旗を各戸に掲げるがよからう。」といひ出したので、衆議忽ち一決し、大急ぎで日の丸の旗を作ることになつた。

「始めて民間で用ひられたのは」

「それにならつて、日の丸の旗を各戸に掲げるがよからう」

日露戰爭の時廣瀨中佐などと共に旅順閉塞隊に加つて戰死した白石葭江といふ中佐がある。この人がまだ大尉時代、明治三十三年北清事變の時の事である。

列國の聯合軍は北京へ乘込む目的で、太沽（タークー）砲臺を攻めにかかつた。イギリスがやつても駄目、イタリヤがやつても駄目、出るものも、出るものも、皆血みどろになつて退却する。最後に一番後に控へてゐたわが海軍の陸戰隊が出る事になつた。

この陸戰隊の第一中隊長が、勇猛音に聞えた白石大尉。「そ

廣瀨中佐 名は武夫。日露戰爭の時朝日水雷長として閉塞隊を指揮し壯烈なる死を遂ぐ。年三十七。

白石葭江 日露戰役の時、第三回旅順口閉塞佐倉丸の指揮官として港口に赴き戰死す。年三十二。

北京 支那河北省の舊都。西紀一九二八年北平（Peping）と改稱さる。

太沽 河北省天津の東約四十餘粁、白

れつ」といふなり、大粒の彈丸雨の如き中を猛然と進擊した。そして各國の陸戰隊が唯々あつけにとられて、「あれよ、あれよ。」といつてゐる間に砲臺を占領してしまつた。眞先に立つた大尉は、劍を打振り〳〵「萬歲、萬歲。」と絶叫する。

第二陣にゐたイギリス軍は、わが軍に次いで砲臺に攀登つて來た。そしてその士官の一人は、豫て用意の英國々旗を取出して手早くこれを竿の先につけ、群がる占領軍の眼前に高高と揭げ出した。英國の國旗は血なまぐさい戰場の風に颯と飜る。

目ざとくこれを發見した大尉は、怒、心頭に發して、「旗！旗！」と叫びながら烈しくあたりを見廻したが、誰も國旗を持つて居らぬ。ぐづ〳〵して居れば、あたら同胞を犬死させた事に

河の河口に在り。

「各國の陸戰隊が唯唯あつけにとられて、『あれよ、あれよ』といつてゐる間」

＊心頭

「ぐづ〳〵して居れ

なる。見よ。足もとには同胞の屍が累々と横たはつてゐるではないか。白石大尉は隼のやうに身を飜すや否や、有頂天で自國の旗をふつてゐる英國士官に對し、「無禮者！」と言ひざま猛烈な體當りを食はせた。不意をつかれた英國士官はばつたりと倒れる。

大尉はその隙にポケットから汗ににじんだハンカチを取出すが早いか、ぷつりと我が右手の藥指を嚙切つた。血汐は滾々と滴る。その血汐を以て見る〳〵ハンカチの眞中に大きな圓を描く。ハンカチは忽ち眞紅の日の丸に彩られる。

と、すぐさまこれを劍の先へ突通して精一杯に捧げひらめかし、咽喉も張裂けんばかりの大音聲を揚げて、「萬歲！」と叫んだ。我が兵は涙を呑みながら萬歲を連呼した。聲も立てずに目

ば、あたら同胞を犬死させた事になる」

ポケット Pocket.

ハンカチ Handkerchief.

＊滾々「血汐を以て見る見る……大きな圓を描く」

を睜つてゐた列國の軍隊も、一齊に日本軍の萬歳に和した。

この事あつて後、各兵は必ずハンカチ大の日の丸をポケットに入れて進むことになつたといふことである。

乃木さんは日清戰爭後に那須野に退いて、こゝで暫く百姓生活をしてゐた。この頃東京へやつて來ると、きつと村の人たちに土産を買つて戻つたものである。

或年の暮には、三尺に二尺程の日章旗を小さな函に入れて村中の家々に贈つた。所がこの日の丸の旗に金廿錢宛がついてゐる。村の人達は、旗をくれた意味はわかるが、どうしてもこの廿錢がわからない。といつてまさか乃木さんの所へ聞きにいく譯にも行かない。とう〳〵有志が集つて會議を

「萬歳に和す」

乃木 名は希典。日露の役、第三軍司令官に補し、攻圍半歳にして旅順を陷る。後、從二位伯爵に敍す。大正元年九月十三日薨、年六十四。

那須野 栃木縣那須郡西那須町。那須山麓。

「日章旗を小さな函に入れて……贈つた」

開き、智慧を絞つた末「どうもこの廿錢は旗をたてる竿を買へといふことらしい。」といふことになつて、一同お揃ひでだんだらに塗つた旗竿を買つた。

乃木さんの庭には村のどこからも見えるやうな非常に高い旗竿が立つてゐて、旗をする〳〵と上げたりおろしたりするやうな仕掛になつてゐる。明くる年の元旦、日の出と共に、乃木さんの庭に日の丸が*翩飜とひるがへつた。村人は「それ」と言ふので、これまで國旗など掲げた事のない家も一齊に旗を出した。

乃木さんは、それから三大節はもちろん、日本人として誰でも祝はなくてはならない記念日などには、必ずこの旗を揚げる。それは例の村中どこからでも見える所だ。うつかり畑

* 翩飜

「掲げた事のない家も一齊に旗を出す」

へ出て働いてゐる人もこれを見ると、「そら乃木さんところに旗が揚つた。」といつて馳せ歸つてこの旗を出した。

乃木さんの旗は那須颪の空つ風に吹かれつゞけ、雨にも雪にも村民に先んじて竿頭高く飜つたので、遂に端の方三寸ばかりも吹きちぎられてしまつた。このちぎれた旗は今尙弟の大館集作氏の許に祕藏されて、乃木さんの思ひ出の一つになつてゐる。

乃木さんは祝祭日にどこかへ招かれた時に、もしその家に國旗が出てゐないやうなことがあると、無言のまゝ門前からてく〳〵歸つてしまつたもので、又片田舍へ行つて、小さな茶店などで忘れずに旗を出してゐると、「有難うございます。」と禮をいはれたといふ。

「有難うございます」

も一つ、日の丸については記憶すべき話がある。

明治二十七年日清戰爭の當時、石黑軍醫總監が軍務上の用向で朝鮮まで出掛けた。膚をさすやうな空つ風のうちに夜はほの〴〵と明けて、空は快晴、一點の雲もない。今日は十一月三日、天長の佳節である。

處は兵站司令部のある兀浦（グリンポ）、司令官山縣少佐は日の出を待つて酒樽の鏡を拔き、鰨を山のやうに積上げて、心をこめた天長節の祝宴を開いた。各〻なみ〳〵と冷酒をついだ杯を手にして肅然と起立し、遙かに故國に向つて萬歲を三唱することとなつて、その音頭を石黑軍醫總監に賴んだ。

石黑總監は起つて、「手旗にする國旗はありませんか。」といい

石黑軍醫總監　子爵樞密顧問官石黑忠悳。弘化二年生。

山縣少佐　名は後信。日露戰役に常陸丸に搭乘して航行中、敵の襲擊を受け割腹して死す。年五十七。功により中佐に昇任せらる。

ふ。一同顏を見合はせたが、萬事不自由な戰場のこと、生憎そこには玩具の日の丸さへもない。突然一兵卒が、「一寸お待ち下さい。私が拵へて參ります。」といつて出て行つたが、間もなく手にして入つて來たのは、半紙に日の丸を染めて、細い竹につけたものであつた。

會するもの總監以下兵卒に至るまで八十三名、總監はこれを受取ると、遙かに東に向つていとも高らかに、「天皇陛下萬歲。」と唱へた。一唱、二唱、涙は頰に傳はる。三唱し終つて、その感激に一同聲を放つて泣いた。

旗は卽座の機轉から、その兵卒が梅干の汁で粗末な半紙の眞中に日の丸を描いたもの、細い竹竿の尖には梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた。この旗はしばらく旭日に

「半紙に日の丸を染めて」

「聲を放つて泣く」

「梅干の汁で……梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた」

むけて兵站部の前に揭げてあつたが、やがて總監はこれを行李に納めて本國へ歸つた。

畏れ多くも明治大帝には當時廣島に大本營をお進めになつていらせられたので、石黑總監は御前に伺候した折に、お土產話としてこの梅干旗の事を御聞きに達した。天機ことの外うるはしく、「その旗を持參せよ。」との畏き御仰。やがてうやうやしくこれを天覽に供し奉ると、そのまゝ御卓の上に三日の間お置きになつて、再び總監にお下げになつたといふ。

（「日の丸由來記」による）

「天覽に供す」

三　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しました處が、十一時すぎ權殿參拜を許されました。權殿と申すは、「崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。」卽ち私どもは此の度、帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋し其の瞬間は何人といへども、一種の靈感に打たれないものは無かつたでございませう。其の權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て之に充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は「表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。」先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられるなど、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。而も餘り廣くない二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も實に御質素なもので、絨毯

笠井信一　貴族院議員。前農手縣知事。昭和四年歿、年六十五。

先月　大正二年一月。

「權殿」

＊詣つて

「御學問所」

＊膺懲　＊宏謨　＊雄圖

＊瀟洒

「御質素」

の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取換を屢〻願ひ出でましたが、御許しがなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年々におもひやれども山水を汲みてあそばむ夏
なかりけり

の御製を思ひおこして、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設備がございます

ストーブ Stove. 煖爐。

けれども、三十七年の冬以來御用ひがない。ひそかに承るに、其の年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰せの儘に火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる嚴寒にも一切ストーブを御使用遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心を伺ひ奉る譯には參りませんが、侍從方の推測し奉る處によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共に遊ばさうとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても思ひ出

「火を消せ」＊られる

されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるし づがふせやを

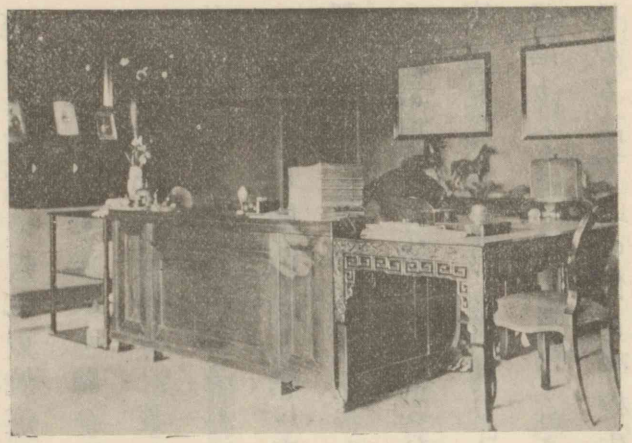
でございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日卽ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には數振の御劍が置かれ、御机は中央に南面し

「別室の拜觀」

今上天皇陛下　大正天皇。

てございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許しを蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。



御常用の御机

まづ御机は羅紗を鏡張りにしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸掛けの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせ

テーブル　Table.「羅紗を鏡張りにしたテーブルで、中程に燒痕がございます」

＊言上

られた折、煙草が墜ちて此の燒痕がついたのだと申す事で御座います。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換申し上げる事を幾度か願ひ出でましたけれども、斷じて御許しが無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至りと拜察し奉ります。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしになり、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鋏も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處

「御硯箱は……竹製」

「筆は……毛尖は禿び、軸の文字は見えない」

「墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされ」

「普通のインキ」

インキ Ink.

に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら省みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは一時青山御所に御出で遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れる樣になりました。そこで御取換を願ひ出でましたが、「なに、宜しい。」とて御許しが無い。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許しを得た。併し適當の皮が無い事を言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申す事で、侍從が、「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうの物

「御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます」

一時 明治六年五月皇居炎上の後。

「なに、宜しい」

ホワイトシャツ White shirt. 洋服

が澤山積重ねてございましたから、何に遊ばす物かを侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留置かせられたのであるとの事でございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は、用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反

の下に着るシャツ。

「シャツの空箱」

「紙袋は……御詠草に」

御歌所　宮内大臣の管理の下に、御製・御歌及び御歌會に關する事務を掌る所。

故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

「一天萬乘の大君におはしながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召で入らせられませうか。皆是れ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

御次の間には、造花や彫刻や種々な御品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、

「節すべきを節して有用の事にのみ……大御心」

「御次の間」

御奬勵の爲に御持歸り又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪め果てて殆ど裝飾の用をしないものまで、其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品の御買上げも、皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千萬の民と共にもたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ

とございますが、實に此のやうな御樂しみを求めさせられる爲に、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々

「御奬勵の爲に御持歸り又は御買上げにならせられた」

「御心づくしの御蔭

として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞を御掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされるたのしみはなし

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力のあらん限りを盡くし、以て我が日の本のかための爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。

（巖手縣學事彙報）

を以て隆々として興り」

「應分の貢獻」

一三　心の置處

山本有三

伊藤一刀齋景久といへば、一刀流の開祖であるから、斯道の人でなくつても、大方は知つてゐると思ふ。全國を武者修行して歩いて、名ある人と技を闘はすこと前後三十三回、唯の一度も敗を取つた事がないといふ劍道の達人である。或時、遍歴の途すがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。すると、そこに劍槍に巧みな神子上典膳といふ士がゐた。一刀齋が來たといふので、早速試合を申込んで來た。しかし立合つて見ると、典膳はもとよりその相手ではなかつた。そこですぐに一刀齋の弟子となつた。是が後に一刀流を大成して世に弘めた小野二郎右衞門忠明の前身である。

山本有三　本名勇造。明治大學教授。文學者。明治二十年生。

一刀齋　一刀流の祖。伊豆の人。

神子上典膳　德川家康の家臣。寛永五年（一六二八）歿。

精神の修養
心の置處はどこか、油斷しないことだ。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に從つて全國を武者修行して歩いた時分の話である。一日、典膳は師匠の極意を訊ねた。すると一刀齋は、

「別に極意といふ程のものはない。たゞ油斷をしないのが第一だ。」といつた。そして稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つて居る時でも、歩いてをる時でも、典膳に少しの油斷でもあると、容赦なく「ぽかり〳〵」と撲りつけた。

或時、典膳が飯を食つてゐると、いつものやうに「ぽかり」と來た。しかし典膳はもう大分修練が積んでゐるから、「來たな」と思ふや否や、ぴたつと箸で受止めてしまつた。

「大分修業が出來て來たな、そのくらゐ油斷しないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながら褒めた。

「極意」

「油斷をしない」

此の時ばかりは典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通しで、痛い目ばかり見せられてゐたのに、始めて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭を持ちまして……。」彼は恭しく師匠の前に頭を下げた。すると忽ち「ぽかり」とやつゝけられた。

「また油斷を始めたか……。」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝ

心を何處においたらよいものか、油斷しないといふのは、心を一方にとられぬことであるといふのが澤庵禪師の論であること。

なり。（中略）何處にも置かねば、我が身に一ぱいに行渡りて、全體に延び廣がりてある程に、手のいる時は手の用を叶へ、足のいる時は足の用を叶へ、目のいる時は目の用を叶へ、そのいる所々に行渡りてある程に、そのいる所々の用を叶ふるなり。萬一もし一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くるなり。思案すれば思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも殘さず、心をば總身に捨置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし。心を一所に置けば偏に落つると云ふなり。偏とは一方に片付きたる事をいふなり。（中略）たゞ一所に止めぬ工夫、これ皆修行なり。心は何處にも止めぬが眼なり。肝要なり。」どつこにも置かねば、どつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、

「心をば總身に捨置き、所々に止めずして、その所々にあつて用を外さず叶ふべし」

心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば十方にあるぞ。」

是は澤庵禪師が、禪劍一如の妙趣を柳生但馬守宗矩に垂示した不動智神妙錄の中から抄出したものである。

油斷といふのは、心のうつろになることではない。心が一方にとられることをいふのだ。兎角、人は刀を手にすると、刀に心を奪はれる。學問をすると、學問に心を奪はれる。褒められると、褒められたことでいゝ氣になる。それが油斷である。

「油斷するな。」「心をどこにもおくな。」

まるであべこべの言ひ方だ。

（途上）

澤庵禪師　禪僧。正保二年（一六四五）寂、年七十三。「禪劍一如の妙趣」

柳生但馬守宗矩　新陰流の劍客。德川家光の劍術師範。正保三年（一六四六）歿、年七十六。

一四　樂訓

貝原益軒

天地の御惠をうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御心にしたがひ、我が仁心を保ちて、常に樂しみ、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみ惠み、善を行ふを以て樂しみとすべし。人の惡を戒めんため、怒り詈るは、已む事を得ざればなり。常には和樂にして、其の氣を養ふべし。（されど又和に專一にして禮なければ、一偏に流れ亂れて樂しみをうしなふ。）（親しき仲にも禮儀あり。）

人のうれひ苦しみを慮りて、人の妨となる事を施すべからず。常に心にあはれみありて、人を救ひめぐみ、かりにも人を

貝原益軒　名は篤信。又損軒とも號す。儒者。正德四年（一七一四）歿、年八十五。「天地の御心をうける」

「人の妨となる事を」

妨げ苦しむべからず。我ひとり樂しみて、人を苦しむるは、天の悪み給ふ所、おそるべし。人と共に樂しむは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂しみなり。

人を恨み怒り、自らほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人の言をとがめ、無禮をいかるは、其の器小なり。是れ皆樂しみを失へるわざなり。怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは、器大なるなり。是れ和氣をたもちて、樂しみを失はざる道なり。」

心こゝに在らざれば、見れども見えず、目の前にみちゝて、樂しむべき有様あるをも知らず。春秋にあひても感ぜず、月花を見ても情なく、聖賢の書に向ひても好まず。唯、私欲にふけりて身を苦しめ、不仁にして人を苦しめ、さがなく賤しきわざをのみ行ひて、わづかなる命の内を、はかなく月日を送ることを、をしむべし。

心明かにして、世の理をよく思ひ知り、物に情あらん人は、我が心にある樂しみを知りて本とし、身の外、四の時、折々につきて、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の内なる萬のありさまを見聞くに從ひて、耳目を悦ばしめ、心を快くし、其の樂しみ、極りなくして、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。

世の人、まどしくしては憂ひ苦しみ、富貴をうらやみて樂し

「誠の樂しみ」

「怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは……樂しみを失はざる道」

「心こゝに在らざれば、……樂しむべき有様あるをも知らず」

「我が心にある樂しみを知りて本とし」

＊まどしく

みなく、富貴にしてはおごり怠りて、欲をほしいまゝにし、財をつひやして樂しみを求むれど、欲にやぶられて、かへりて自らくるしみ、人を苦しましむ。すべて富貴も貧賤も、其のねがひ外にありて、内に道を得ざれば、苦しみのみにて樂しみなし。

もし此の理を知れらば、身の上につきて樂しみ、外を願ふべからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として、樂しみあらずといふ事なかるべし。坐には坐の樂しみあり、立には立の樂しみあり、行にも、臥にも、飲食にも、見るにも、きくにも、ものいふにも、樂しみあらずといふ事なし。樂しみはもとより心に生まれつきて、身にそへるものなればなり。されど此の樂しみを知りて樂しむ人すくなし。理くらければ樂しみを知らず、欲ふかければ樂しみをうしなふ。

（樂訓）

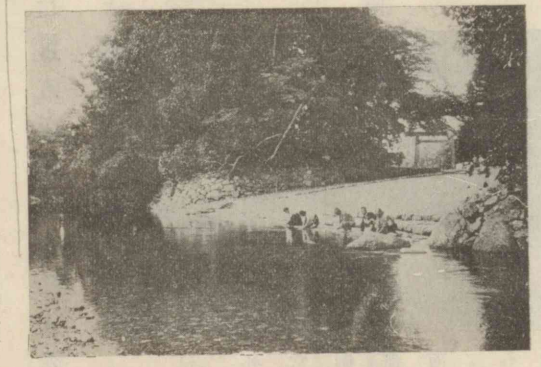
「富貴も貧賤も、……内に道を得ざれば」

「理くらければ樂しみを知らず、欲ふかければ樂しみをうしなふ」

一五 伊勢參宮

五十嵐　力

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語につくせません。五十鈴川の清き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、それから頭上の木の枝を透して空を仰ぎ、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠青色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並ん



五十鈴の流

五十嵐　力　文學博士。早稲田大學教授。明治七年生。

山田　三重縣宇治山田市。

外宮　豐受大神宮。

内宮　皇大神宮。

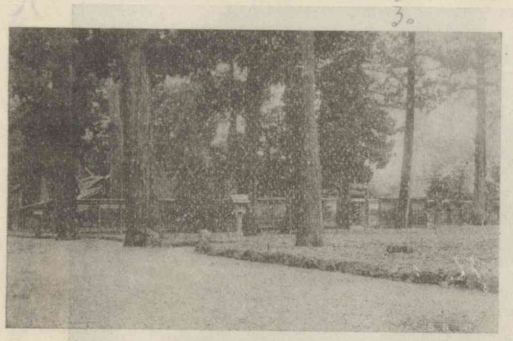
「畏さ」

「水底の小鮎の數を讀みつゝ」

＊綠青色

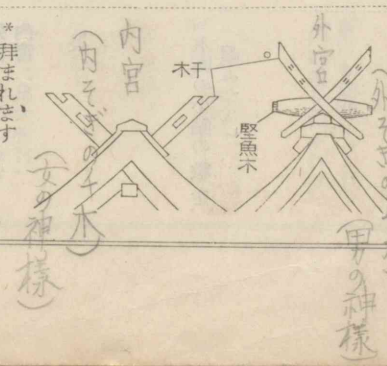
「天を支へる柱のやうに」

でゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に、千木・堅魚木の金色が拜まれます。（みられます）更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奥に疎らに立つた神杉に護られて御白石のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。



外宮御側面

さうして傍に竝んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮かべました。

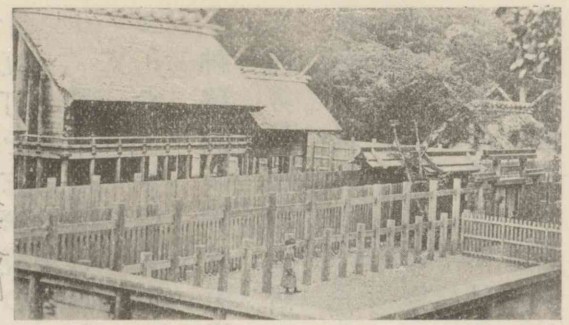


＊拜まれます

＊拍手

＊高聲

西行法師　もと佐藤義清といつた。有名なる歌僧。建久元年（一八五）寂、年七十三。



内宮御後面

直き清き強き心をあらはして

すく〳〵立てり、たゞふと神杉

大廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。

＊大廟

「『單純』といふものの偉大さを」

さうしてこの御社の神杉は、樹木の神しさを極度に表はしたもののやうに思はれます。」

私どもは内宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて、押戴いて懷に し、御手洗川（みたらしがは）に口すゝいで、をりしも聞ゆる笙・篳篥（しやうひちりき）の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへり

（手鈴川さい小）

（後の方でしてある）

笙・篳篥

笙

篳篥

＊雅樂

「幽寂な雅樂の音に送られて」

みかへりみ宇治橋を渡つて、昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山、朝熊山に走らせました。

御社のうしろの御門をろがみてひとかけの苔いたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつた謂れを考へました。

大神宮儀式帳に、

『度會の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎭ります國と悅び給ひて、大宮定めまつりき。』

宇治橋 五十鈴川にかけた橋。長さ約一〇〇米。

朝熊山 三重縣度會郡に屬する。海拔五五〇米。

神路山 かむぢやま。內宮の神苑を繞る鬱蒼たる山林。

御裳濯川 みもすそがは。五十鈴川をいふ。

「大御心にかなつた謂れを考へました」

大神宮儀式帳 二卷。伊勢の內・外宮から朝廷に奉つた注進書。

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。

最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の積極的・光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落着く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中にいつか朝熊山の麓に着きました。

（我が書翰）

葦原の千五百秋の瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就いて治せ、行矣、寶祚の隆えまさんこととまさに天壤と窮無かるべし。（日本書紀）

＊消極的煩累

＊饒舌

日本書紀 三十卷。元正天皇の養老四年（一三六〇）舍人親王、太安麻呂等が勅を奉じて撰進したもの。

一六 冬の日

河井醉茗

ああ、よく晴れた
愉快に晴れた朝。
昇りかけた冬の日の光は
私を慰めてくれます。（今日も亦暖いであらうと慰めてくる。）

なんと多數の人が歩いてゐることでせう。
みんな健かな足どりで
大都會の中心へ、中心へと（仕事が待ってゐるから、そこへゆく。）
潮のやうに吸ひこまれてゆきます。

河井醉茗　名は又平。詩人。明治七年生。

冬の日

私もその一人
私の髪には塵埃がかかつてゐない
私のきものには垢がついてゐない
晴れた日の下に
いそいそと歩いてゐます。

仕事は私を待つてゐます
みんなに與へられた「時」は
私にも與へられてゐます。
虚しい日ではない。

（紫羅欄花）

例へば十人のんが集つて雑談に夢中になつて居るうちだん〳〵話がだれて来たけれど皆それを感じてゐながら云ひ出せない中に「もう帰らうぢやないか。」といつて立上る人があります。すべてさういふ風な働をする人と立上る人があつたらその人は「急所をきめる人」といひたい人である。

一七　人生の急所

羽仁もと子

今こゝに十人の人が車座になつて、雑談に耽つてゐるとします。話がだん〳〵だれて來たことを、すべての人が感じてゐます。すると、その中で一人「もう歸らうぢやないか。」といつて立上る人があります。すべてさういふ風な働をする人を、私は急所をきめる人といひたいと思ひます。人生の大きい舞臺にも小さい場面にも、必ずさうした急所があります。その急所々々をよい方面にきめてゆく力を養ひ持つてゐる人は、運のよい人、運の強い人で、反對に、その急所にふれることを避け恐れる心持に支配されがちな人は、運のわるい人、運の弱い人なのだと思ひます。またその急所々々を悪い方向に

羽仁もと子　思想家。「婦人の友」主幹。明治六年生。

「雑談に耽る」

「急所をきめる人」

「運のよい人、運の強い人」

「運のわるい人、運の弱い人」

きめてゆく人は、力の強い悪人で、ある點までは運が強いやうに見えますけれど、その人は遂に滅ぼされるか、でなければ悔い改めて善人になる人であります。

この急所をきめる力があるかないか。唯そのことが運のよい人と悪い人とをふり分ける急所なのかと思はれます。運のよい悪いばかりではありません。人間がこの世の中に生まれて來て、毎日々々營々として暮してゐます、その仕事がものになるか、ならないかも、やはりその毎日する仕事が、始終急所をきめてゆくやり方か、急所を避けるといふやり方か、その二つに一つによつてきまるのだと思ひます。物の急所といふものは、いつでもまた必ず難所なのですから、そこへ力をこめて、よい方向に廻轉したら、もうその仕事が九分通り成就

「急所をきめる力」

「難所」

「力をこめて」

してゐるやうに思はれます。

急所は難所で、廻轉しにくいものですけれど、小さい仕事でも大きい仕事でも、急所を目がけて、そこに力を入れなくては、どんなにまめに、こつ〳〵と働いてゐても、到底物にはならないで、骨折損の草臥儲といふやうな、毎日または一生を送つてしまふことになると思ひます。

人と對談をしてゐる時でも、その人にほんたうにいひたいこと、いはなくてはならないことがあるのに、どうしてもそれに觸れることが出來ないで、ぐづ〳〵と他のことをいつたり、可笑しくもないのに、つい笑つたりしてゐる時ほど、自分の意氣地なさを感ずることはありません。思が内に熟した時は、起てといふ嚴かな命令が私達に下つてゐるのです。その命

＊草臥儲

「嚴かな命令が私達に下つてゐる」

よく考が出来た時は、起てといふ命令が下つてゐるのだから、ずん〳〵進んで自分の思ふ通りに實行する人は、幸福な將来をつくる人である。

命を本氣に聞いて、ためらはずに起つ人は、日々自分の將來のために、幸ひな運命、強い運命をつくりつゝ進んでゐる人です。

私たちは永久に祝福される運の強い人になるためには、なさんと欲する所をなさなくてはなりません。さうしてそのなさんと欲する所のことは、まだ低くても、まだ貧弱でも、めいめいの全生命によつて深く望まれることでなくてはなりません。迷ふ時には、深く長く思はなくてはなりません。しかし思にのみ偏することは、支配されることは、本能にのみ偏することと擇ぶ所がないのです。常に全生命を活動させて、急所をつかみとつては、それを足場にして進まなくてはならないのです。急所をつかんでは足場にすることは、毎日々々の生活の中でも、十分に氣をつけたら練習の出來ることです。

（考へばかりして實行しない。）

（もとにして、次から次にやつてゆく。）

＊運の強い人

「全生命によつて深く望まれることでなくては……」

「練習の出來ること」

かうあつてはならないかうありたいと思つた時にその通りにし、心を整理する。類を持つて集う。

若しも自分たちが部屋を掃く時に、いらないものがそこにあつても、そのまゝに、置き場所のないものがあつても、その置き場を考へないで、たゞ掃けるだけの所を掃くといふやり方であると、だん〳〵に部屋の中がちらかつて、遂にやう〳〵坐る所があるだけになるでせう。私達の心の中の世界も同じことです。自分に對しては勿論のこと、他人に對しても、かうあつてはならない、かうありたいといふことは、部屋の中からいらない物を運び出し、入用なものを新たにつくるやうな、急所にふれてゆくやり方をしないでゐると、だん〳〵にお互の心は雜物のために狹められ、廣く深くふれ合つて、互に味はひのある有益な交りを經驗することが出來なくなる。かういふ、よい運が向いて來る道が塞がる狀態になると、それと反對

「いらない物を運び出し、入用なものを新たにつくるやうな」

に、どんな隙間からでも入つて來る、惡魔の息が、かうした一人一人の側に、好んで通つて來るやうに思はれます。

雜談の場合でも、部屋の掃除でも、私たちのふれる日常の場合において、常にその急所に向つて頭と手とを働かせるやうに、自分をも他人をも深く見て、やはりほんたうにいひたいと思ふこと、したいと思ふことをするやうにする、それが卽ち急所であり、自分の第一要求であります。常に自分の一身、自分の一家と、範圍の狹い生活にならないやうに、私達の見る所を廣くして、いくつもの急所が目に入つて來る時は、多くの急所の中の急所を選んで手をつけること、それがまた大いなる急所です。それ〴〵の場合の急所、卽ち難所を處置してゆくことは、また同時に、常に目のつけ所のよい、骨の折れる緊張した

「急所に向つて頭と手とを働かす」

「急所の中の急所」

生活をすることになり、それは卽ち好運に到る確な道と思ひます。

世の中には、なるべく急所を避けて、當りさはりのない生き方をすることを、賢いことだと思ふ人が多いやうですけれど、さういふ考へで長く暮してゐる人は、はじめはよい頭を持つてゐても、だん〳〵に物の急所を見る目が鈍くなり、とう〳〵人生の急所の分らない人になつて、賢いつもりで目をつけたことが、皆あてが外れることになります。運の惡い人といふのは、卽ちそれだと思ひます。

私たちは、自分をも人をも、皆よい運命の下に生まれてゐるものであることを信じたいと思ひます。（羽仁もと子著作集）

たれも自分は好運をつかみ得るやうに生れついたと信ずるのが、好運の人となる第一歩を知らねばなりぬ。

「急所を見る目が鈍くなり」

「皆よい運命の下に生まれてゐる」

一八　近江聖人の幼時

村井弦齋

雪ならば幾たび袖を拂はましはなの吹雪の滋賀のやま越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の、眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く。

辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景、辛崎の松は暮靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪、今よりこの山路に掛らば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊にて宿を求めんかと、獨り旅の少年は前路を睨んで、

村井弦齋　名は寛。昭和二年歿、年六十五。

近江聖人　中江藤樹。名は原。慶安元年（一六四八）歿、年四十一。

「霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く」

＊凛冽

滋賀の山　滋賀縣大津市附近。

＊蕭條

＊暮靄朦朧

坂本　比叡山の東麓。

暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、「彼の山を越ゆれば、我が故郷。今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しくこゝに留らん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲れも厭はじ。いで〳〵心を取直し、今宵の中にこの小山越えんものを。」と、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどり〳〵て行く道の、岩につまづき木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵ましして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。一山寂寞として、耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下潛る、細谷川の水の音、

我が故郷　滋賀縣高島郡小川村。

「家に歸らば疲れも厭はじ」

松の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かにもの凄く聞えて、怖しとも悲しとも譬へんやうなし。かゝる難處と知りもせば、麓にて一夜を明かしもしものを、旅慣れぬ身の悲しさ、足に任せてこの深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷りて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪を恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に餓ゑを感じて、寒さは一入身にしみ渡り、眠るともなく死ぬともなく、前後を知らずなりにけり。

懷かしの故郷や。藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々

*谷り　「松の根方に打倒れたり」

「夜は漸く明けたれども」

の家は未だ多く起出でず。かの家は我が友の家なりけり、この家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、そゞろにあはれを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて、復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。脩竹一叢思ふまゝに根を延ばして、彼方此方に生ひ出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音さへ寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母様が、この雪の朝の寒

*須臾

*脩竹

天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よりその袂を引き、「母様、私が汲みませう。」と涙ながらに取りすがる。事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か。藤太郎、どうしてこゝへ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに參りました。まづ内にお入り遊ばせ。おつむりに雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母をこの雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり。「叔父様とでも一緒か。」「いえ、一人で御座います。」母は聲を勵まし、「叔父様が一人和郎をお出しなされたか。」「いえ、叔父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ、「怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が歸つた譯を。いえこゝで聞きませう。聞かな

「車井の綱をしつかと握りしまゝ、石の如く立てり」

叔父様 祖父吉長をさす。藤太郎は父が早く歿したから祖父吉長に養はれた。吉長は大洲侯に仕へた。藤太郎も從つて大洲に居たのである。

いうちは、めつたに家へは入れません。」颯と吹來る朝風に、地上の雪はくる〳〵と捲揚げられて、横に二人の顏を撲つ。

藤太郎は歸りし次第を物語りぬ。母は我が子の優しき心根に、そゞろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、わざと言葉を勵まして、「和郎はこの母の言葉を忘れましたか。和郎を叔父樣に賴む時、一旦國を出たからは、あつぱれ立派な人にならないうちは、決して中途で歸るなと、あれほど堅く言聞かせた事を忘れましたか。この母が難儀を忍ぶのも、たゞ和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれがうれしからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬことはあるまい。母は再び逢ひません。その足で大洲へお歸りなさい。」

「その足で大洲へお歸りなさい」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて雪の上に跪きぬ。母はその失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、かくまで我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、つらき事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲れを休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして復思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と強くは叱れど、聲は沾みぬ。藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、微かなる聲にて、「はい、解りました。」「それなら今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸の絞らるゝ思。遂に堪へか

大洲　愛媛縣喜多郡の町。當時加藤貞泰六萬石の城下。

「力拔けて雪の上に跪きぬ」

ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。「母様、この藥は輝(あかぎれ)の妙藥で、世にも得難き品。これ差上げたいと、わざ〳〵持つて參りました物。これだけはお取りなされて下され。」と、新谷(にひや)にて得し藥を差出す。母は快く、「おゝ和郎の志、これだけは受けませう。」と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。母は恥づかしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろほろと落つる涙。雪はなほ霏々たり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子、滿天の風雪、路悠々。（近江聖人）

「藤太郎は屹として立上れり」

新谷にて得し藥　「新谷」は大洲の北、六粁にある村。

「見合はす顏、互の眼には涙一杯」

「雪はなほ霏々たり」

大家族主義

一九　幸福

穗積重遠

日本國は唯一無二の皇室が中心になつて、全體が大家族を成してをる國柄であります。日本は一つの大きな家であります。「國家」といひますが、日本は本當に文字通りに國にして家であり家にして國であります。今日の如く九千萬の大家族であり、天皇陛下を宗家の御主人とする大家族であることが我々の幸福であるのであります。」昭和八年の十二月二十三日皇太子殿下のお生まれになつたあの朝、サイレンが先づ一聲鳴つた、さうしてもう一聲なつた。その二聲なつた時に、私はすぐにこの歌を思ひ出したのであります。

御民われ生けるしるしありあめつちのさかゆる

穗積重遠　法學博士。男爵。東京帝國大學教授。明治十六年生。

「天皇陛下を宗家の御主人とする大家族」

皇太子殿下　御名明仁(アキヒト)。繼宮(つぐのみや)と稱し奉る。

サイレン　Siren.

御民われ　萬葉集卷六、海犬養宿禰岡麻呂の歌。

時にあへらく思へば

これは萬葉集にある歌であります。萬葉集には奈良朝時代の歌が多く載つてをりますが、奈良朝は實に盛んな御代であつたらしい。

あをによし寧樂の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり

寧樂は今は別の字を書きますが、昔は寧に樂しいといふのでかういふ字を書きました。この盛んな御代に生まれあはせた自分は何と幸福な事であるよといふのが「みたみわれ」の歌であります。私はあの朝二聲のサイレンを聞いた時に、この歌を口誦んだのであります。奈良朝はどんなに盛んであつたか知りませんが、しかし今日の日本の盛んな有様とは到

あをによし　萬葉集卷三、小野ノ老の歌。

「サイレンを聞いた時に、この歌を口誦んだ」

底較べものにならないでせう。我が國は今や世界最大最盛の國の一つとして榮えてゐるのでありますから、奈良朝の民も幸福であつたらうけれども、昭和の御代の我々は、實に「生けるしるしありあめつちの榮ゆる時にあへらく思へば」であります。この歌は奈良朝の歌としてよりむしろ今日昭和聖代の讃歌として、尚更、意味があると思ふのであります。

しかし奈良朝時代と今日と違ふところは、奈良朝時代には他に何にも問題がなく、天下太平で、寧樂の都の八重櫻の盛りに醉ふことが出來たのでありますが、今日は中々遊んでばかりゐられる世の中ではありません。それ故我々聖代の臣民は非常に幸福であると同時に、又非常に責任が重いのであります。この聖天子を戴き奉つて、この日本をどういふ方に持

「昭和聖代の讃歌」

「この日本をどういふ方に持つて行くか」

つて行くかといふ事が、我々の兩方の肩に掛つてをる責任でありますから、幸福が大きいと同時に責任が非常に重いといふ事を我々は十分に考へねばならぬのであります。

（日本の過去現在及び將來）

元朝や神代のこともおもはるゝ　守武

元日や一系の天子富士の山　鳴雪

守武　姓は荒木田。伊勢内宮の神官。連歌に長じた。天文十八年（一五四九）歿、年七十七。

鳴雪　姓は内藤、名は素行。俳人。大正十五年歿、年八十。

二〇　歌御會始

千葉胤明

明治天皇の御製を拜誦して、つねづゝ私どもが感激に耐へないのは、敬神・愛國・愛民の御情の溢れてをることであります。國家有事の際に遊ばされた御一例を申しますと、

こらは皆軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらむ

「愛民」

明治三十七年、戰爭中の御製でありますが、この一首を拜しましても、陛下の民草をあはれみ給ふ大御心がうかゞはれて、たゞ〳〵感激する外はないのであります。

「民草をあはれみ給ふ大御心」

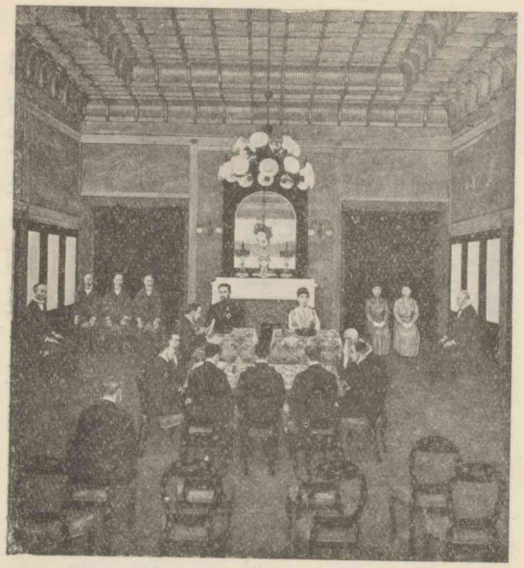
忘れもいたしませぬが、明治三十八年一月元日、旅順開城の公報に接した國民は、津々浦々に至るまで、戰勝を壽ぎ、萬歲を

「明治三十八年一月元日」

千葉胤明　宮内省御歌所寄人。元治元年生。

叫んで祝杯をあげたのでありますす。それでその年の正月は、何となく生々潑剌の氣が、全國にみなぎつてをりました。

かうした中に、御恒例による新年歌御會始の御式が、一月十九日に行はれました。御題は「新年山」と申すのでありまして、御式場は鳳凰間でありました。私ども寄人の席は、玉座近くに設けられてありましたので、二時間の長い間、畏れ多くも龍顏を仰ぎ奉るわけでありました。



歌御會始（聖德記念絵畫館壁畫）

*生々潑剌

「御式場は鳳凰間」

*龍顏

参列の光榮に浴した人々は、それ〴〵定めの席についてゐます。

兩陛下におかせられましては、御機嫌うるはしく出御遊ばされました。

いよ〳〵預選歌の披講となりまして、式場は寂として聲なく、水を打つたやうになつてをります。何れも入選者が何人で、その歌はどういふのであらうかと、耳を欹ててゐたのであります。

その時、講師の聲が朗かに、この靜けさを破つて響きました。

「山梨縣、陸軍歩兵二等卒妻、大須賀松枝。」

意外の入選者なので、一同はぱつと胸を躍らせました。

軍國の新年歌御會始にはふさはしいやうにも思はれるし、

「式場は寂として聲なく、水を打つたやう」

さりとは又珍しいことであると、誰しもが考へたらしいのも無理のないことであります。

陛下には、御式中は常に御微動だも遊ばされないのでありますが、この一刹那御頭を少し御傾け遊ばされ、講師の讀上げる預選歌を、じつと御聽き遊ばさうとなされる御樣子でありました。

講師の聲は、靜かに續きました。

つはものに召しいだされしわが背子はいづこの
山に年迎ふらむ

人も人なり、歌も歌なり、竝みゐるもの一同ぐつと胸を打たれたのであります。

陛下には、この時極めて御感深く聞し召された御樣子に拜し奉りました。

眼前咫尺の間に龍顏を仰ぎ、陛下のこの御樣子を拜し奉つて、私どもは思はず熱い感涙のために眼をうるほしたのであります。もし御式場でなかつたならば、私は取亂して泣いたに相違ありません。

限りなく御仁慈にわたらせ給うた陛下の大御心を拜察し參らせますと、今も猶、眼底に涙の宿るを覺えるのであります。

あらたまのとしたつ山をみる人のこゝろ〳〵を
歌に知るかな

この御製は、この歌御會始の終つた後、陛下の遊ばされたのであります。この御製の蔭には、かうした一場のうるはしい物語が藏されてゐたのであります。

（明治大帝）

「御頭を少し御傾け遊ばされ」

「極めて御感深く聞し召された御樣子」

*咫尺

「私は取亂して泣いたに相違ありません」

「御製の蔭には」

二 盲坑夫

下位春吉

一九一七年三月三日の朝、南歐の空には春立つことも早く、空は底の底まで長閑に澄渡つて、鵜の毛ほどの雲の影も見えない。廣いアルドブランヂーニ邸の庭にはオレンヂの花の強い香が立罩めてゐる。

その朝、まだ外は春の夜の甘い眠りの薄絹に包まれて靜まり返つてゐる時、ベッカストリーニの室の戸をけたゝましく叩く人がある。

「ナターレ君、起きろ！一大事が持上つたぞ！」

正しく大隊長フォリエロの聲である。手さぐりに寢臺を下りたベッカストリーニが、戸を開いて聲する方に擧手の敬

下位春吉 イタリヤ、ローマ大學教授。

アルドブランヂーニ邸 Villa Aldobrandini. 歐洲大戰中イタリヤ軍の失明者を收容した所。

オレンヂ Orange. 橙。

ベッカストリーニ Natale Beccastrini.

禮をすると、

「今日君に勳章授與の式がある。畏い事だが、皇太后陛下が親ら君の胸に勳章をつけてやりたいとの仰せとかで、急にその式場の準備に取りかゝつた。この癈兵院の總裁も、副總裁も大慌てで出て來られて、今邸内は大騒ぎだ。何しろ足下から鳥が立つやうな話で、皆驚いてしまつたよ。君も早く支度を整へるがよい。」

大隊長の聲は晴やかである。ベッカストリーニの榮譽をわが事のやうに喜ぶ嬉しさの動悸が、その聲の裡にも響いてゐる。夢ではないか。今までうつら〳〵と見續けてゐた春の曙の夢の中に、まだこの聲を聞いてゐるのではないかしら。覺めても光明を見ず、永劫の闇に生きる外なき盲軍曹の身

「今日君に勳章授與の式がある」

皇太后 マルゲリータ。Margherita.

「大隊長の聲は晴やかである」

＊永劫

には、この突然の悅びは夢とも現とも分かち難かつた。

「早く支度をし給へ。」

と、輕く肩を打つた大隊長の手は、彼を夢幻の天國から現實の境に移した。

「皇太子殿下もお出でになるさうだ。服裝などにも十分氣をつけ給へ。」

戸の際に、今まで默々として起立の姿勢で立つてゐた盲軍曹の頭は、次第に垂れた。やがてその足下にこぼれ落ちた涙が床を濡したかと思ふと、彼は不動の姿勢のまゝ啜り泣きに泣くのであつた。

「僕も嬉しいぞ！」

堪らなくなつて、大隊長が盲軍曹の手を握りしめた時、枯枝

皇太子 ウンベルト。Umberto.

「彼は不動の姿勢のまゝ啜り泣きに泣く」

「枯枝の如く碎かれた彼の手」

の如く碎かれた彼の手に、大尉の涙がはら〳〵と散つた。

癈兵院では大混雜である。役人が走る、人夫が叫ぶ、軍人が飛ぶ、電話の鈴がひつきりなしに鳴る。大門を入る自動車の驀音、玄關を遠ざかる馬車の軋り。式場の準備は忙しく、誰も彼も右往左往に驅けまどうてゐる。寢耳に水の勳章授與式の時刻が刻々に近づく。

夜は明け放れた。まだ夢心地で、ベッカストリーニは顏も洗ひ服も着けた。始終彼の側にあつて手助けしてゐたのは從卒のピエトロ-バッチスチである。朴訥寡言な田舍者のピエトロは、正直一徹な牛のやうな男で、敏捷機智な才物ではなかつた。ベッカストリーニに服を着せておいて、一寸室の外に出たきり歸つて來ない。式場準備の大騷ぎの颶風の中に

「癈兵院では大混雜である」

＊朴訥寡言

＊敏捷機智

捲込まれて、何處かでうろ〳〵と驅廻つてゐるのであらう、何時まで待つても歸つて來ない。服を着けたばかりで、寢臺の横の椅子に腰かけてゐた盲軍曹は、氣が氣でない。門から入つて來る車馬の音を聞く毎に、彼の碎けた手はじれつたさうにぶる〳〵と顫へてゐる。

時は容赦なく進んで、式場に繰込む人の流は引きも切らない。

「ピエトロ！……ピエトロ！」

彼の聲は、從卒が出て行く時に開放つた戸口から、幾度か廊下に響き渡つた。

その時不意に廊下から澄んだ聲が答へた。

「君、誰を呼ぶのです。何の用ですか。」

「先刻から從卒を呼んでゐますけれど、……どこへ行つて了つたのだか、……僕にまだ靴を穿かせなければならないのに……。」

廊下の聲の主人はつか〳〵と室の中に入つて來た。

「僕が穿かせて上げませうか。」

「さうですか。では濟みませんが、……どうも恐れ入ります。」

ためらひながら足をさし伸べた盲軍曹の足下に跪いて、今進み寄つた少年は丁寧に靴を穿かせた。

「これ位でいゝですか……。餘り固くはありませんか。少し緩めませうか。」

「いや結構。どうも有難う……。」

ベッカストリーニがその少年にお禮を言つてゐる時、廊下

「盲軍曹の足下に跪いて、……少年は丁寧に靴を穿かせた」

の彼方から四五人の靴音が聞えて來た。

「殿下！　殿下！　何方においでで御座います。殿下！

式場の準備が出來ました……。」

と呼立てる聲に、

「こちらに居るよ。今行く。」

盲軍曹の足下から立上つて、

「さやうなら！」と輕く挨拶して

出て行くのは、實にイタリヤ王

國の皇太子殿下であつた。

さてはと氣がついて、驚いて起立した盲軍曹は、不動の姿勢で、遠ざかり行く靴音の方に擧手の敬禮をさゝげた。

見る影もない不具となつた盲目の坑夫の足下に、一國の皇

ベッカストリーニ

太子殿下が跪いて靴の紐を結び給ふ光景を想へ。あゝ尊い詩ではないか、莊嚴な畫ではないか。

「尊い詩、莊嚴な畫」

間もなく式が始つた。大勢の役人や市民達で、さしもの廣い邸の中庭は立錐の地も餘さない。感激に打たれた盲坑夫の顏は、いつになく蒼ざめてゐる。

＊立錐

「いつになく蒼ざめてゐる」

式は型の如く進んだ。すべてがたゞ一つの夢としか思はれない盲坑夫には、誰彼の演説も遠い幻の奥の人聲としか聞えなかつた。「軍功勳章銀章、陸軍工兵曹長ナターレ・ベッカストリーニ！」と誰かが呼立てた聲に驚いて起立すると、幾千の拍手が迅雷の碎けるやうに響いた。

＊迅雷

「はい。」

彼はよろ〳〵と二三歩進み出た。敬禮をして立つ彼の胸

「胸に、皇太后陛下

に、皇太后陛下の御手が觸れた。青い綬の軍功勳章の銀章が陛下の御手によつてつけられた時、二度目の迅雷が中庭から響きわたつた。

盲坑夫がやをら元の席に着かうとする時、鈴のやうな御聲が彼を呼止めた。

イタリヤ皇太后マルゲリーター陛下

「あなたは目も見えず、兩手の指も碎かれた不自由の身で、絶えず新聞や雜誌に見事な作品を發表しておいでなさる。私はあなたの作品は、役人に命じて一つ殘らず集めさせて讀んでゐます。今朝院長に聞くと、あなたは右の手に殘つたその一本の指で、タイプライターを打つて、あの立派な作品

*やをら「鈴のやうな御聲が彼を呼止めた」

Type-writer. 印字器。

餘りの光榮に畏い爲。

を書出されるとか。若し差支へなければ、私の前で、何でもよいから、タイプライターを打つて見せてくれまいか。」

盲坑夫は默つて立つてゐる。顏の色はます〳〵蒼くなる。唇がふるへる。癈兵院の總裁が彼を勵ますので、やうやくに、

「畏まりました。」

と答へた彼は、從卒に命じて、平常使ひ慣れたタイプライターを持つて來させて、陛下の前の卓上に置かせた。

やはらかい春の日が彼の頸を撫でる。皇太后陛下・皇太子殿下、二人の女王殿下を始として、百官が彼の後から覗き込んでゐる。やんごとなき方々の息が身に近く感ぜられる。

今朝まだ曉の夢の覺めない頃から、身にふり掛つた重ね重ねの光榮は、唯一つの夢としか思はれない。夢に夢見る心地

「ます〳〵蒼くなる」

で、タイプライターの前に腰掛けてゐる盲坑夫の後から、

「何でもよいから……。」

と玉の御聲がかゝると、彼は忽ち電氣に打たれたやうに身震ひしたが、顏は全く蒼白く、手はとめどもなく顫へた。

右の手に殘つてゐる拇指が、タイプライターの文字の上を電の如く走つたかと見ると、紙上に打出された一行の文字は、

「聖恩の渥きに感泣す。」

とのみで、後は續けもえせず、空虛なる兩眼からはら〳〵と溢れ出る熱涙を抑へんとして抑へる能はず、タイプライターの上に泣伏してしまつた。

暖かい三月の太陽は、この人生の大畫面一杯に薄紅の光を浴びせてゐた。

（大戰中のイタリヤ）

「全く蒼白く、手はとめどもなく顫へた」

「聖恩の渥きに感泣す」

「タイプライターの上に泣伏してしまつた」

「人生の大畫面一杯に」

三 茶の間

島崎藤村

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにある柱の側へ各自の背丈を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで屆きさうに見える。毎年の暮に、鄕里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狹い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡いと言出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言ふものが

島崎藤村 名は春樹。文學者。明治五年生。

あつて、家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戯れから始つたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ〳〵には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

「誰だい、この線は。」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお德のがある。いつぞや遠く滿洲の果てから家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までもそこに殘つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとして

「鉛筆で柱の上に記しつけて置いた」

「頭文字だけを羅馬字であらはして置く」

「末子が最早九文の足袋をはいた」

ゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい〳〵一部屋づつ要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狹苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ、末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言暮して來た。それに、二階は明かるいやうでも西日が强く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「こゝの家には飽きちやつた。」

「一人前に近い心持」

と言出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちやんと二人で行つて探して來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顔に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集る子供等から離れて、獨りで自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向の障子からは、

「自分でも動かずにゐられない心の要求」

「私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた」

「獨りで自分の部屋を歩いて見た」

家中で一番靜かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。一枚の硝子戸越しに、隣の大屋さんの高い塀と樫の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜かさがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集る子供等まで一時沈まり返つてしまつた。

どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいらいらさせた。

「家中で一番靜かな光線」

「地下室にでもゐるやうな靜かさ」

「寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ」

「父さんを忿らせることが、父さんの身體には一番悪いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。」

それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すご〳〵と障子のかげの方へ隱れて行つたこともある。

「子供でも大きくなつたら。」

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。眼には見えなくても降積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

私が地下室に譬へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く傳はつて來た。私達の住む家は、西側の塀を境に、ある邸つゞきの拔け道に接してゐて、小高い石垣の上を通る人の跫

「言つて見せると」

「降積る雪のやうな重いものが、……私を埋めた」

「町の響」

音や、いろ〳〵な物賣りの聲がそこにも起つた。何處の石垣の隅で鳴くとも知れないやうな、ほそ〴〵とした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の緣先へ鋏を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狹い四疊半に隱れ、庭の草木を友として、僅かに獨りを慰めようとした。子供は到底母親だけのものか、父としての自分は偶然に子供の內を通り過ぎる旅人に過ぎないのか――そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に氣を取直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

安い思ひもなしに、移り行く世相を眺めながら、獨りでじつ

「地蟲の聲」

「獨りを慰めようとした」

「子供を護らうとする心」

＊世相

と子供を養つて來た心地はなかつた。しかし子供はそんな私に頓著してゐなかつたやうに見える。

過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて來たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとゞめないものはない。髪はめつきり白くなり、坐り胼胝（だこ）は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひさうに重かつた。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るやうにつくづゝと見た。

「自分の掌はまだ紅い。」

と獨り思ひ直した。

ある日の午後の好い時を見て、私達は茶の間の外にある縁

「嵐の中に坐りつゞけて來たやうな」

「午後の好い時」

側に集つた。そこには私の意匠した縁臺が、縁側と同じ高さに三尺ばかりも庭の方へ造り足してあつて、蘭・山査子（さんざし）などの植木鉢を片隅の方に置けるだけのゆとりはある。石垣に近い縁側の突當りは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところで、その上には時々の用事なぞを書きつける黑板も掛けてある。そこには私達が古い籐椅子を置き、簡單な腰掛椅子を置いて、互に話を持寄つたり、庭を眺めたりして來た場處だ。毎年夏の夕方には、私達が茶の間のチャブ臺を持出して、よく簡單な食事に集つたのもそこだ。

庭にある遲咲の乙女椿の蕾も漸くふくらんで來た。それが眼につくやうになつて來た。三郎は縁臺のはなに立つて、庭の植木を眺めながら、

山査子　薔薇科、山櫨子（サンザシ）科屬の落葉灌木。

「庭」

「次郎ちやん、こゝの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黒板の前に立つて何かいたづら書きをしてゐた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のゐる方へ行つた。

「そりや、引抜いて持つて行つたつて、構ふもんか――もとからこゝの庭にあつた植木でさへなければ。」

「八つ手も大きく成りやがつたなあ。」

「あれだつて父さんが植ゑたんだよ。」

「知つてるよ。山茶花だつて、薔薇だつて、さうだらう。あの乙女椿だつて、さうだらう。」

氣の早い子供等は、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くやうな調子に話し合つた。

「今にも引越して行くやうな調子」

「そんなにお前達は無造作に考へてゐるのか。」

と私はそこにある籐椅子を引きよせて、話の仲間に入つた。

「お父さんぐらゐの年齢になつて御覽、家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに。」

やがて自分等の移つて行く日が來るとしたら、どんな知らない人達がこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思はれた。庭にある山茶花でも、つゝじでも、何度私が植替へて手入れをしたものか知れない。暇さへあれば箒を手にして、自分の友達のやうにそれらの木を見に行つたり、落葉を掃いたりした。過ぐる七年の間のことは、そこの土にもこゝの石にも種々な痕跡を殘してゐた。

いつの間にか末子は黑板の前を離れて、霜溶けのしてゐる

「家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに」

「そこの土にもこゝの石にも種々な痕跡を殘してゐた」

庭へ降りて行つた。

「次郎ちやん、芍藥の芽が延びてよ。」

末子は庭にゐながら呼んだ。

「蔦の芽も出て來たわ。」

と、また石垣の近くで末子の呼ぶ聲も起つた。

（嵐）

老年は私が達したいと思ふ理想境だ。今更私は若くなりたいなぞと望まない。どうかしてほんたうに年をとりたいものだと思ふ。十人の九人までは年をとらないで萎れてしまふ。その中の一人だけが僅かに眞に老年に達し得るかと思ふ。

（島崎藤村）

「蔦の芽も出て來たわ」

二三 至誠

小林一郎

昔のローマの諺に「人生は短し、技藝は久し」といふのがある。一千年のむかしに死んだ人の作品でも少しも損はれずして今に殘つて居る。吾等は其の作品を翫賞することによつて、宛ら一千年むかしの人と相語る思ひがする。吾等の心と一千年むかしの人とが其の作品を通じて相接するのである。まことに人生は短いけれども技藝の生命は久しい。併しなほ深く考へて見ると、獨り技藝ばかりでは無い、有らゆる努力の結果は皆久しき生命をもつて居るのである。

東京に住する五百萬の人は皆水道の水を飲んで居る。此の水道といふものが無ければ、五百萬の人が其の生命を保つ

小林一郎 中央大學教授。明治九年生。

ローマ Rome. イタリヤの首府。

「努力の結果は皆久しき生命をもつて居る」

「水道」

ことは出來ぬ。此の水道の起りは隨分舊いもので、天正十九年に德川氏の臣大久保藤太郎といふ人が、將軍家康の命を受けて、江戸の人の飲料水に就いて取調べたのに端を發し、承應元年に至り多摩川沿岸の住人庄右衞門・淸右衞門の二人が將軍家綱の命によつて、多摩川の水を江戸へ引いて飲料水としたのが其の第一期ともいふべきである。これより幾度か改良せられ又擴張せられて今日の水道となつた。此の承應年中の水道開鑿の監督をした、江戸町奉行神尾備前守の功も亦沒せられぬものである。凡て此等の人々の名は東京の水道を始めた恩人として永遠に記念せらるべきであるが、たとへ此等の人々が如何に苦心し努力しても、實際其の水道の開鑿に當つて鋤や鍬を揮つて骨を折つた多くの人夫達の力が加

天正十九年 後陽成天皇の御代。(紀元二三五)。
德川氏 家康。德川初代の將軍。元和二年薨、年七十五。
承應元年 (紀元二三二)
多摩川 東京府南多摩郡雲取山に發し、東に流れて東京灣に注ぐ。
家綱 德川四代の將軍。延寶八年(二三四〇)薨、年四十。
承應 (紀元二三二—二三五)。

はらなければ、水道は完成せずして終つたに違ひない。されば今日此の水道の水によつて生命を保つて居るものは、皆此等の人夫達に對し感謝しなければならぬわけである。此等の人夫達は二百數十年のむかし死んでしまつて、其の姓名さへ全く傳はらぬ。其の子孫が今まで存して居るかどうか全く分らぬ。併し此の開鑿に打込まれた此等の人々の心の力は、此の水道の水の絕えぬ限り、東京市民の生命の中に永く活きて居るのである。吾等は此等の事實を思ひ合はせて「人生は短し、技藝は久し」といふローマの諺を改めて「人生は短し、努力の結果は久し」としなければならぬことを痛感する。

顧みれば十九世紀以來多くの記念すべき出來事があつたが、其の中で特に著しいものは科學の進歩である。多くの貴

「此等の人々の心の力」

「科學の進歩」

い學者や實際家の努力によつて、科學は此の百數十年間に目覺ましい進歩を示し、又其の研究の結果が實際に應用せられて、世界の人の生活狀態が全く一變してしまつた。飛行機や無線電信やテレヴィジョンが發達して來ると、世界の距離がすつかり短縮されたことを感ぜずには居られぬ。併し吾等は斯くの如き驚異的の進歩が、十九世紀以來遽に爲し遂げられたものと考へてはならぬ。これは十六世紀以來コペルニカス・ケプレル・ガリレオ等の人々の不屈不撓の努力の蓄積が、斯かる結果を生んだものと見なければならぬのである。眞理を追窮する研究家の熱心は、不合理なる壓迫によつて抑壓せらるべきものではなかつた。コペルニカス以下の極めて勇敢なる學者は有らゆる迫害に堪へて其の研究を續けた。

テレヴィジョン Tel-evision. 電氣の力により此方の實景を遠隔の地に送り活動寫眞の樣にそのまゝ遠方のスクリーンに寫す裝置。

コペルニカス Co-pernicus.(1473—1543). ポーランドの天文學者。

ケプレル Kepler.(1571—1630). ドイツの天文學者。

ガリレオ Galileo.(1564—1642). イタリヤの物理學者、天文學者、哲學者。

而して其の研究の結果が續々と發表せらるゝに隨ひ、今までは唯神祕とのみ見られて居た日月星辰の運行、風雨寒暑の變化等が一々合理的に說明せらるゝやうになり、吾等は唯洪大無邊なる神の御力を讚歎しつゝ漫然と毎日を送るのでなく、此の天地の間に存する凡ての秩序、凡ての法則を能く理解して最も安らかなる心をもつて毎日を送ることが出來るやうになつた。これが近世科學の淵源とも稱すべきものである。實に此等の研究家の勇氣は、決死の覺悟をもつて敵陣に向つて突進する勇士に比して、優るとも決して劣らぬものである。此等の學者の研究によつて宇宙の洪大にして微妙なる組織が次第に明かになつたが、それ等の研究の結果を聞いた人達は、はじめ甚だしく寂しい感じに襲はれた。洪大無邊なる宇

「漫然と毎日を送る」

＊洪大無邊

宙の中に於て吾等の占めて居る所の地域は、殆ど比べものにならぬほど狹いものである。悠久なる宇宙の生命に比べて見ると、吾等の五十年や六十年の生涯はまことにいふに足らぬものである。吾等が此の豆の如く小さい地球の上に於て如何に大きな事業を完成して見たところが、宇宙の大に比べては全く無意味のものに過ぎぬ。併しながら更に考へ直して見ると、吾等は少しも自ら小にし自ら賤しむには及ばぬのである。此の宇宙の洪大なる組織、此の悠久なる生命を知つたのは、吾等自身の力ではないか。吾等自身に具はれる心の力によつて、凡て此等の事を明かにし得たのではないか。吾等は五尺か六尺の小さい身體をもつて、狹い地上に吾等の一生を托し、僅かに百年に足らぬ壽命をもつて居るのみである。

「此の悠久なる……吾等自身の力」

さりながら吾等は坐して此の宇宙の隅から隅までの祕密を知ることが出來るのである。又數千萬年のむかしの事を知り、數千萬年の後の事をも豫想し得らるゝのである。ライプニツは人を稱して「小宇宙」といひ、孟子は「萬物皆我に備はれり」といつたが、まことに其の通りである。吾等の心の力はまことに偉大なるものである。是は此の宇宙の大生命と、吾等の生命とが相通つて居るからであると考へなければなるまい。吾等は宇宙と共に生きて居るのである。それは太平洋に打つ浪の一つ〳〵が皆太平洋全體の水と通ひあつて居るのと同じことである。斯ういふことが彼の貴い研究家によつて教へられたのである。

中庸の中に至誠の貴いことを說いて、

ライプニツ Leibniz.（1646—1716）. ドイツの哲學者。

孟子 名は軻。支那の哲學者。（西紀前三七二—二八九）。

「吾等は宇宙と共に生きて居るのである」

中庸 四書の一。もとは禮記中の篇名。

唯天下の至誠は能く其の性を盡くすことを爲す。能く其の性を盡くせば則ち能く人の性を盡くす。能く人の性を盡くせば則ち能く物の性を盡くす。能く物の性を盡くせば則ち以て天地の化育を*贊く可し。以て天地の化育を贊く可ければ則ち以て天地と參す可し。

とあるが、盡くすとは則ち能く究め能く知り、又其の知る所を能く應用することである。今日吾等が此の文化的生活をして多くの便益を得て居るのは、十六世紀以來の多くの學者研究家の至誠の賜といふべきである。獨り學者研究家のみならず、其の研究の結果を實生活に應用することに力を用ひたる有名の人、無名の人の、至誠の賜として、感謝しなければならない。

(實業之日本)

*化育
*贊く

「至誠の賜として、感謝しなければならない」

二四 櫻井驛

松居松翁

(攝津國櫻井驛の城主櫻井兵衞尉康光が庭前。中央、古松一株、下手は一面の庭樹を植込み、其の後に母屋の見ゆる心。上手も木振面白き庭樹、夏草の花壇などあり。處々に菊水の紋打ちし幕を張る。正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、その山腹に塔頂を露はす。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠・正遠及び櫻井康光夫妻と共に出で來る。正成・正忠・正遠の三人は武裝す。)

正成(正忠に) 仲やお久がまゐつたら、直ちに發足致しませう。一同に支度をさせていたゞきたい。

正忠 承知致しました。

(向うより武士一人かけ來る)

武士 奥方と和子樣とが御出でになりました。

松居松翁 名は眞玄。劇作家。昭和八年歿、年六十四。

時 延元元年(一九六)五月。

處 攝津國櫻井驛。

人 楠木判官正成。四十三歳。庄五郎正行。十二歳。備前守正忠(一族)。惠美太郎正遠(同)。櫻井兵衞康光。四十餘歳。お久の方(正成の妻)。水無瀨(康光の妻)。

天王山 京都府乙訓郡大山崎村にある小山。

寶積寺 天王山腹にある眞言宗の寺。

*和子

正成　おゝ、これへ案内してくれ。

武士　はつ。（向うへ去る）

（向うよりお久の方と庄五郎とが武士に伴なはれて出づ。侍女二人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を舁ぎて出づ）

庄五郎（正成にすがりつきて）父上、とう〳〵参りました。

正成（庄五郎の頭を撫でつゝ）うむ、よう來たな。（櫻井夫妻に）この様な遠慮のない奴でございます。（庄五郎とお久の方に）櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢が厚い御世話に預つた。

（お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する）

お久　それは忝い事でございます。荒くれ者ばかりで、さぞ御迷惑でございましたらう。

康光　何の手前どもこそ。都にては判官殿に何かと御世話に預つて居ります。

水無　何にしても、こゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成　いや、兩人には申し聞けたいことがございます。暫くこゝを拜借しませう。（武士に）供のものは、御臺所でもお借り申して休息させるがよい。

水無　いえ、わたくしが御案内申し上げます。

お久　それでは却つて恐れ入ります。

水無（供の者に）さあ、かうお出でなさりませ。（康光夫妻を先に召仕たち下手に入る。武士は一禮して向うへ去る。行々子（よしきり）鳴く）

お久　此の度はわざ〳〵お迎をいたゞきまして、有難う存じました。

判官　檢非違使の尉。元弘三年（一九二三）正成檢非違使尉となる。

＊申し聞けたい

「行々子鳴く」

正成　うむ、わしも急に逢ひたくなつたのでな。齡のせゐかの、今度は不思議に庄五郎の顔が見たくなつてな。

庄五　父上、私も初陣が出來るのでござりますか。

正成（笑つて）　それで鎧櫃をもつて來たのか。

庄五　はい。

正成（なほ笑つて）お前はまだ早いよ。

庄五　併しその中に戰の無い時が參りは致しませんか。

正成（苦笑して）　さうなれば結構ぢやが、お前一代、いや何代も戰をせねばならぬ事になるであらう。（思はずお久の方と顏を見合はす。お久の方黯然となる）

庄五　それでも今度は父上と一緒に戰がしてみたいなあ。

正成　さういふ時節が來るかも知れぬ。併し今度はもう一

「黯然となる」

度留守居せえ。

庄五　でも、私はもう十二歳になつて居ります。

正成　併しまだ戰のしやうは知らないからな。

庄五　いゝえ存じて居ります。父上が戰場へ出られた御留守の間でも、私は將監や母上から兵法の講釋を伺つて居りました。孫子・吳子も、六韜・三略も、昔讀んでしまひました。

正成　それは偉いなあ。父は此の春以來一緒に暮して居りながら、それほどとは知らなかつた。お久、お前にさへまかせて置いたら、二郎も小二郎も、その他の伜たちも、庄五郎の弟たるに恥ぢないものに仕立ててくれるであらう。そしてわしの志を襲ぎ得るものが既に五人もあるとすれば、正成は心を安く、いつでもこの世を去れるわけだ。

將監　こゝにては左近衞將監楠木正家。
孫子　支那古代の兵法家。名は武。「孫子」十三篇を著はす。
吳子　支那古代の兵法家。名は起。「吳子」一卷を著はす。
六韜　支那古代の兵書。
三略　支那古代の兵書。
二郎　正成の第二子。後に正時。
小二郎　正成の第三子。後に正儀。
五人　正成の第四子正秀、第五子正平を併せていふ。
「いつでもこの世を去れるわけだ」

庄五　（父の顔をじつと見て）　では、父上はもう死を決しておいでになるのでございますか。

正成　（やゝ聲を勵まして）その尋ねかたは愚か過ぎるぞ。苟も武士の家に生まれたものは、如何なる時、如何なる場合でも、討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。わしは赤阪や千劍破に城を築いた時でも、この春の洛中の戰でも、きつと討死の覺悟は定めて居た。それで居て、今日まで無事に戰場をかけめぐつて居た。そこが吳子の所謂「死を必する時は則ち生きる。」ぢや。死生を超越してこそ初めて眞の武士といふ事が出來るのぢや。

お久　それに致しましても、なぜ今度に限り、わざ〳〵私どもをお呼寄せになつたのでございますせう。心得のため伺つて置きたいと存じますが。

正成　（笑つて）今もいふ通り、これは齡のせゐらしいぞ。實は今度の戰は、正成の出つくはした何十度の合戰中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものだ。ゆふべも眞夜中に目が冴えて眠られぬまゝ、吳子を讀んだ。そして、あらゆる疑が解けた。「兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり。三軍の災は狐疑に生ず。」ぢや。正成の兵法、今日までは、如何なる時も狐疑せず、敵をして疾風迅雷耳を掩ふの遑なからしめるにあつたが、今度ばかりは狐疑し猶豫した。その爲に庄五郎の身も餘計に案ぜられて、お前たちを呼寄せる事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたるやうな愚かさで、正成、心ひそかに恥ぢて居るの

「愚か過ぎるぞ」

赤阪　大阪府南河内郡赤阪村字水分。

千劍破　同郡千早村金剛山の半腹。

この春　延元元年（一九三六）二月、正成京都に尊氏を破る。

死を必する　吳子に「凡ソ兵戰ノ場ハ屍ヲ止ムルノ地ナリ。死ヲ必スルトキハ則チ生キ、生ヲ幸スルトキハ則チ死ス。」

「死生を超越してこそ初めて……」

兵を用ふる　吳子に「故ニ曰ク、兵ヲ用フルノ害ハ猶豫最モ大ナリ。三軍ノ災ハ狐疑ニ生ズ。」

「今度ばかりは狐疑し猶豫した」

杞人　列子に「杞國ニ人ノ天崩墜シテ身ノ寄スル所無キヲ憂ヘ、寢食ヲ廢スル者有リ。」

ぢや。併しわしも今年は四十三ぢや。今までの戰場で無事であつただけ、これからは段々危險が大きくなつて行く譯ぢや。親子三人が手を取合つて長閑に語り合ふ折も、この次にはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、お前たちにわざ〳〵來て貰つた事も無益ではなかつたらしい。いや、庄五郎の學問識見のほどを知つただけでも、わしの心の曇は去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る。これも云はばお前たちの賜物だ。正成禮をいふ。

お久　そのお喜びを伺つて、私どもも、どのやうに嬉しいか分りません。今度は今度はと、どの合戰の時でも、お身の上を危みながらお見立て申して居りましたが、今度ばかりは安心して御見送り申す事が出來ます。有難うございまする。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出來ますだけは御身命をお厭ひ遊ばして……。（思はず涙ぐむ）

正成　よくいうてくれた。わしも益もなく生命を棄てようとは思はぬ。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出來る身ぢや。併し今度の戰は、九死に一生を求めるのぢや。萬に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お前の兄上、わしの弟たちも、枕を並べて討死をせねばなるまい。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ覺悟をもつて居てくれるのぢや。この正成は生まれ落ちて、一つ自得した事とてもないが、ただ士卒と共に樂しみもし、苦しみもする事を知つて居る。そしてそれはこの三

「天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る」

「今度ばかりは安心して御見送り申す事が出來ます」

「神佛の思召に適ひます事ならば……」

「よくいうてくれた」

お上　後醍醐天皇。

兄上　備前守正忠。

略の卷から敎へられたのぢや。庄五郎、お前も熟讀玩味して、出來る事なら、徒らに弓槍を取つて護國の楯となるばかりでなく、治國平天下の輔佐の臣ともなるやうに心掛けるがよい。（腰の小刀をぬいて）これは先年、お上が隱岐の島より還御の砌、『此の度のことは、正成そち一人の力であつたぞ。』といふ忝い綸言と共に下し賜はつた尻懸則長ぢや。どうか楠木家の續く限、子孫のものに語り續けて、世にも稀なる朝恩を永久に傳へてくれ。それからこの一卷は、今も云つた通り、この正成が一生の心の糧ともなり、數十箇度の合戰の指南車ともなつてくれた貴重な書ぢや。幸ひにお前の代になつて、この中の語が王佐の事業の資ともならば、正成あの世から禮を云ふぞ。お久にはこの上いふべきこともないが、たゞ心を用ふべきは足利殿ぢや。正成一代にあの人ほど獪い人を見た事はない。如何なる手だてをもつて近づいて來ようとも、決してその人の甘言に耳をかすな。お前ほど堅固な心のものに、いらぬ用心をさせるやうではあるが、子故の闇に迷ひ易いが親の情ぢや。君子も道を以てすれば欺かれぬものでもない。戒めても戒むべきは足利殿ぢやぞ。

お久　御敎訓一々に肝に鏤りつけて、きつと御言葉の通りに致します。御安心を願ひます。

正成　それを聞いてわしも心が落着いた。

（この時上手に陣鐘・太鼓の音聞ゆ）

（楠　正成）

「治國平天下の輔佐の臣ともなるやう」

先年　元弘三年（一三三）。

尻懸則長　大和尻懸の刀鍛冶。略〻同時代の人。こゝにてはその人の鍛へし刀の意。

「お久にはこの上いふべきこと」

子故の闇　「人の親の心は闇にあらねども子を思ふみちに迷ひぬるかな」（藤原兼輔）

「わしも心が落着いた」

二五　國史に還れ

徳富蘇峯

國史に還れ。日本國の歴史は大和民族の系圖である、我等が祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歴史を通して知るより他に方法はない。國史は實に忠實なる案内者である、信頼すべき指導者である。

我等は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は、平等觀よりすれば皆同胞である。されど歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同一でなく、乙國と丙國とも亦等しからず、丙國と甲國とも勿論同じでない。十箇國あれば十箇國だけの相違があり、百箇國あ

徳富蘇峯　名は猪一郎。貴族院議員。文久三年生。

「國史に還れ」

「信頼すべき指導者」

「歴史的に考慮せねばならぬ」

＊平等觀

＊歴史觀

れば百箇國だけの差異がある。此の特殊の國性を維持するを得て、始めて獨立國の意義が完うせられる。獨立國の本義は、形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展させ、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。此の歴史の中の事實は、必ずしも悉く敬すべく、仰ぐべき事のみではない。人間は神ではない。人間の所作には、樣々の過失もあれば罪惡もある。しかし總括して言へば、日本の歴史は大和民族の恥辱史ではなくて光榮史である。

日本の皇室が如何に世界に比類のないありがたい皇室であるか、日本の國民が、一旦緩急に際しては、如何に猛烈且勇敢

＊把持

「大和民族の誇」

＊緩急

に護國の精神を發揮したか、又大和民族の中に、世界的偉人と稱するに足る者を如何に輩出せしめてゐるかは、歴史の語る所である。恐れ多いことながら、我が明治天皇の盛德大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切に、これを會得することが出來る。彼の五箇條の御誓文の如き、又彼の帝國憲法の如き、國史の背景なくしては、たゞ雄快なる一種の文書たり、乾燥無味なる一部の法文たるに止まるであらう。

凡そ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、詭激狂妄の赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神等は、何れも我が國史を閑却した爲に生じたものである。現狀を株守するも國史を知らぬが爲、現狀に不安を抱くも國史を知らぬが爲、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬが爲、自惚根性に囚れて醉生夢死するも國史を知らぬが爲に外ならぬ。

國史に還れとは、すべての國民に歴史家となれといふ意ではない。それには專門の學者がある。たゞ日本國民として、日本歴史の、其の大なる筋道を諒解せよといふのである。日本國民は豐富なる歴史を持つてゐる。此の歴史こそ「日本」の潛在せる寶藏である。苟も國民的に生活し、活動しようとする者は、先づ此の寶藏に總べてを求めなくてはならぬ。

（國民小訓）

「國史の背景によつて始めて明白に、……會得することが出來る」

五箇條の御誓文　明治元年三月、明治天皇は新政の方針五箇條を述べられた。

帝國憲法　明治二十二年二月十一日宣布さる。七章七十六箇條から成る。

＊戀舊思想
＊保守退嬰
＊詭激狂妄
＊赤化主義
「國史を閑却した爲に生じたもの」
＊自惚根性

＊醉生夢死
「日本國民として、日本歴史の、其の大なる筋道を諒解せよ」

――〔終〕――

語釋

一　自學自習の精神に基づき、本文中の語句の解釋を列擧したものである。

一　一語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。

一　辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。

イ　訓方。

ロ　文法上の品詞の性質。

ハ　同意語・同音語・對照語・熟語。

一　月見草

月見草　ツキミサウ　夕方から花を開き翌日の日中になつて凋(シボ)む故にこの名がある。北アメリカの原産。

すが〳〵しい　爽やかで氣持がよい。

いひがたく　言葉にはひあらはせぬくらゐに。

旅亭　リョテイ　やどや。旅館。

眼のあたり　マノアタリ　目の前に。

凭る　ヨル　よりかゝる。

後退　コウタイ　あとしざり。うしろの方に退くこと。

はじける　裂け開ける。

ふうはりと　柔かく輕いさまにいふ。

鼻を撲つ　強くにほふ。

はかない　(一)存在のたしかならぬこと。かりそめなること。(二)死ぬこと。

二　蟲の音

發心　ホッシン　(一)佛によつて救ひを求める心即ち菩提心(ボダイシン)をおこすこと。(二)出家すること。(三)轉じて廣く殊勝な心がけを起すことをいふ。

風物　フウブツ　(一)季節々々のながめ。(二)すべてのながめ。

觸覺　ショクカク　皮膚など觸官による硬・軟・寒・熱等の感じ。

聽覺　チャウカク　聽神經の作用によつて音聲を感ずること。

朧夜　オボロヨ　かすんで明らかでない春の月夜。朧月夜。

單調　タンテウ　一本調子で變化がないこと。

心の眼が開く　さとりをひらく。

土用　ドヨウ　夏の土用をいふ。小暑の後十三日(七月二十日頃)から立秋まで十八日間のこと。

情趣　ジャウシュ　おもむき。あぢはひ。

寂寥　セキレウ　しんとしてさびしいこと。

三　靖國社頭に立ちて

社頭　シャトウ　神社の前。

神垣　カミガキ　(一)神社の垣。(二)神社。

手向く　タムク　さゝげる。そなへる。

委ねる　ユダネル　まかせる。

散兵壕　サンペイガウ　彈を避けながら敵を射擊出來るやうに設けた壕。

辟易　ヘキエキ　勢に恐れてしりごみすること。

拍子　ヒャウシ　物のはずみ。とたん。

標識　ヘウシキ　目じるし。

逆襲　ギャクシフ　さかよせ。

接戰　セッセン　互に近づき迫つて戰ふこと。

腑甲斐ない　いくぢがない。

劍戟　ケンゲキ　つるぎとほこ。武器。

隷下　レイカ　配下。

諸兵連合の一隊　歩・騎・砲・工等、各種の兵士を含む一隊。

衷心　チュウシン　心からなること。眞情。

慚愧　ザンキ　面目なく思ふこと。はづかしく思ふこと。

餘燼　ヨジン　もえのこりの火。もえさし。

杳(ヱウ)として　ばつたりとだえて。

通信兵　通信によつて味方の連絡を保つことを任務とする兵。

赤衞軍　過激派の政府を衞(マモ)る軍隊。

燒却　セウキャク　燒きすてること。

現字機　ゲンジキ　電信を文字にあらはす機械

消耗品　セウカウヒン　使用するたんびにへり又は無くなる品。炭・油・紙等。

沈毅　チンキ　おちついてしづかりしたこと。

剛膽　ガウタン　膽力がすわつてゐること。

孤立無援　コリツムエン　一人ぼつちで、他に助力する人のないこと。

殉難　ジュンナン　國難によつて一命を捨てたこと。國難にしたがつて死する。「殉」はしたがふ意。

從容(ショウヨウ)として　おちつきはらつて。「從容」はゆつたりとしたさま。

網羅　マウラ　網を張つて魚・鳥を捕へるやうに殘らず集めること。「網」は大あみ。「羅」は小あみ。

階級を超越して　カイキフチテウエツシテ　階級といふことを頭に置かないで。「超越」とびこえること。

振作　シンサク　ふるひおこすこと。

莊嚴　サウゴン　たふとくおごそかなること。かうごうしいこと。もと佛經の語。衣服宮殿等を立派に飾りたてて嚴かなることをいふ。「シヤウゴン」が正しいが、一般には「サウゴン」といふ。

四　翼

紫紺　シコン　紫がかつた紺色。

漂つて　タダヨツテ　一箇所に定まらず浮かび動いてゐる。

椋　ムク　落葉喬木の一種。

すくめて　ちぢめて。

動悸　ドウキ　心臟の鼓動。

波動　ハドウ　音や光などのために空氣が振動して上下四方に傳はりゆく狀態。

黃枯る　キガル　枯れて黃いろくなること。

すつきり　さつぱり。

掠めて　カスメテ　すれすれに通り過ぎる。

視線　シセン　眼のむき。

搏つ　ウツ　はじたきをする。

翔つて　カケツテ

昂げ　アゲ

羽搏　ハバタキ

リズム　旋律。音律。

塊團　カタマリ

五　溪をおもふ

背景　ハイケイ　背後のながめ。(一)繪畫で其の繪の中心點の後に描かれる景色。(二)舞臺で奥に見える書割の裝置や景色。(三)轉じて後援者、うしろだての意味にも用ひる。

ほつかりした　ぼか〳〵　暖かい。のんびりした。

あわたゞしい　おちつかぬ。

筏　イカダ　山から伐り出した竹や木を組合はせ水に流して運漕するもの。

鶺鴒　セキレイ　雀に似た小鳥。尾を上下に忙しく動かす習性がある。

木洩日　コモレビ　梢をとほして射す日光。

おどろ〳〵　おどろくばかりに。仰山に。

斷崖　ダンガイ　けはしく突立つてゐる岸。

呆氣にとられて　アッケニトラレテ　驚きあきれて。

雪解水　ユキゲミヅ

峽　カヒ　山と山との間。

ほの白く　かすかに白く。ほんのりと白く。

身じろぎ　身動き。

まぼろし　そこにありもせぬ物の姿が現にあるやうに目に見えて、やがて消え失するもの。

おもかげ　すがた。かたち。

寂寥　セキレウ　さびしさ。

六　小鹿の家

眸を睜る　ヒトミヲミハル　目を大きく見ひらく。

グードーナイト　おやすみなさいの意。

花蘆　ハナゴザ。

野趣　ヤシュ　田舍らしいおもむき。いかにも飾りけのない、自然のまゝのもつ情趣。

ふくよかな　ふつくりとした。肌觸りのふつくりと柔かさうな。

ハウスーウオーミング　新宅祝ひ。

狼藉な　ラウゼキナ　亂暴な。

國際的精神　各國の人々が、互の立場をよく理解して、親しく交際する心がけ。

涵養　カンヤウ　學識・氣質を養成すること。「涵」は、ひたす。

輪廻　リンエ　佛經の語。人の生死、事物の興亡などが、絶えず移つて行つて、恰も車輪の廻りて際限のないやうだといふ意味の語。「リンネ」と發音する。

理解　リカイ　その事の道理を悟りしること。

七　野菊

野菊　菊科の多年生の草。初秋の頃淡紫色の色を開く。

くぼたみ　くぼんでゐる處。くぼたまり。

八　三人の時計

ドン　正午を報ずる大砲の音。午砲。

質　タチ　性質。

俯向いて　ウツムイテ

罵る　ノノシル　荒々しい聲で咎(トガ)める。

かつきり　丁度。ぴつたり。

利口　リコウ

九　雲萍雜志抄

明けくれ　朝晩。

時刻は　時刻は人のうへにありく行かぬは、人の心の持ちかた次第である。

便(タヨリ)とする　あてにする。

飼はずなりにき　飼ふことをやめてしまつた。

すべての事にかよひて　すべての事にあてはまつて。

棄恩云々　恩愛の情によつて生ずるまよひから逃れて、さとりをひらき佛の道によつて父母を救ふこそ、ほんたうに恩にむくいる道である。

守邪　シュジャ　病氣(邪)にたかされぬやうに心をひきしめて身を守ること。

樞要　スウエウ　最も大切なこと。

みづからゆるす　自分で心をゆるめる。

邪氣に感冒する　かぜをひきこむ。

きざす　おこりかける。

一〇　茶話

通曉　ツウゲウ　くはしく知つてゐること。

「曉」さとる。

古今傳授　コキンデンジュ　古今和歌集中の祕傳としてゐる難解の語の意味を口傳すること。

造詣　ザウケイ　學問又は技藝が深く進むこと。

頓才　トンサイ　その場その場の出來事を、見事に取りさばいてゆく頭のはたらき。きてんがきくこと。

歌の詠み口　歌の作り方。

ちよつかいを出す　手出しをする。相手がうけ答へをするやうに、からかひ半分にしむける

こと。
即座に　ソクザニ　すぐさま。其の場ですぐ。
御所車　ゴショグルマ　牛に曳かせる車の一種。昔、身分のある人が乘つたもの。
式臺　シキダイ　玄關に設けた板じき。
惡戯な　イタヅラナ
趣向　シュカウ　しくみ。工夫。

一一　日章旗

奉戴　ホウタイ　頭にいただく。
衆議(シュウギ)　忽ち一決し。皆のものゝ評議が直ぐにきまること。
日露戰爭　明治三十七、八年戰役ともいふ、日清戰役後の滿鮮問題に端を發しておこる。
閉塞隊　ヘイソクタイ　旅順港を根據とする露艦が時々に出沒して我が軍の行動を妨ぐる恐れがあるので灣口に船を沈めて之を封じ込まうとした。そのために つくられた部隊。
北清事變　ホクシンジヘン　明治三十三年義和團匪の內亂によつて清國と列國との間に起つた紛爭。
士官　シクワン　陸海軍の少・中・大尉及びその相當官をいふ。
颯(サツ)と　急に。
目ざとく　目ばやい。
音(オト)に聞えた　有名な。
心頭　シントウ　心の上。心。
あたら　惜しいこと。
犬死　イヌジニ　無駄な死。
累々　ルルルル　かさなるさま。
隼　ハヤブサ　猛禽類の一。形普通の鷹よりも小さい背は蒼黑く、胸腹は灰白全面に斑紋あり。
有頂天　得意になつて我を忘るゝこと。
言ひざま　いふなり。
滾々　コンコン　水の盛んに流れるさま。
大音聲　ダイオンジャウ　大音。
日清戰爭　明治二十七八年戰役ともいふ。朝鮮半島に東學黨の亂起るに因を發して大戰となる。
だんだら　だんだんと同じ。だんだら縞。
翩飜　ヘンポン　ひらひら。
空風　カラカゼ　雨風を交へずに吹く强い風。
佳節　カセツ　祝の日。
兵站部　ヘイタンブ　作戰軍の後方にあつて軍需品の輸送又は收容を取扱ふところ。
なみ〳〵　あふるゝばかり。
肅然　シュクゼン　おごそかにとゝのつてゐること。
機轉　キテン　思ひ付き。
大本營　ダイホンエイ　大元帥のおはす最高の統帥部。

一二　明治天皇の御遺物を拜す

午餐　ゴサン　ひるめし、晝食。
參內　サンダイ　宮中に參上すること。
權殿　ゴンデン　かりどの。天皇崩御の後、一時、御靈を奉祀せる御殿。
皇靈　クワウレイ　天皇の大みたま。
恩典　オンテン　めぐみの御沙汰。なさけある處置。
靈感　レイカン　人間の靈の微妙な作用にあらはれる感覺。
謁見　エツケン　めうへの人にお目にかゝる事。
萬機の政　バンキノマツリゴト　すべてのまつりごと。
御親裁　ゴシンサイ　御みづからおとりさばきになること。
德教　トクケウ　道德上の教。
大憲　タイケン　憲法。
膺懲　ヨウチョウ　道に

そむくものをうちこらすこと。
師　シ　軍勢。軍隊。
宏謨　クワウボ　天皇が國家をお治めになる上の大きな御はかりごと。
雄圖　ユウト　すぐれた御くはだて。
瀟洒　セウシャ　さつぱりとして綺麗なこと。
絨毯　ジュウタン　花模樣をあらはした厚い毛織の敷物。
恐懼　キョウク　恐れ多く思ふこと。
推測　スキソク　おしはかること。
斯民　シミン　この民。わが國民。
桐火桶　キリヒチケ　桐で作つた丸火鉢。
おほかる　多くある。
しづ　賤しい民。
ふせや　あばらや。
軸物　ヂクモノ　床の間の掛物(カケモノ)のこと。
仔細　シサイ　こまかに。くはしく。
禿び　チビ　すり切れる。
慙愧　ザンキ　心に恥ぢ入ること。
上奏　ジャウソウ　天皇に申し上げること。
裁可　サイカ　君主が臣下の伺ひ出たことを親裁して許可したまふこと。
主務者　シュムシャ　大臣。
署す　ショス　書きしるす。署名する。
隨時　ズキジ　いつても。折々。
詠草　エイサウ　歌のしたがき。
御歌所　オウタドコロ
反故　ホウゴ・ホウグ・ホグ・ホゴ。
冗費　ジョウヒ　むだなものいり。
一天萬乘の大君　天下を治めたまふ大君。
隆々　リュウ〳〵　勢の盛んなさまをいふ。
服膺　フクヨウ　心に留めて片時も忘れぬこと。
應分の貢獻　オウブンノコウケン　身分相應の働をして國のためにつくすこと。

十三　心の置所

斯道　シダウ　この道。こゝでは、劍道を指す。
技を闘はす　わざをくらべ合ふ。
遍歷　ヘンレキ　あまねく歩きまはること。
容赦なく　遠慮なく。
用を叶(カナ)へ　用事をはたす。
肝要　カンエウ　大切。
どつこ　どこ。いづこ。
十方　ジッパウ　東西南北の「四方」と、四方の間の「四隅」と、上下の「二方」と。
禪劍一如　ゼンケンイチニヨ　禪宗も劍道も、修業工夫を重ねてさとりを得ることは一つである。
垂示　スヰジ　教へ示す。
うつろ　から。からつぽ。空虛。

一四　樂訓

人にしあれば　人なのであるから。「し」は强めの詞。
仁心　ジンシン　なさけ深い心。
流れ亂れて　うちとけすぎて愼みがなくなり。
慮る　オモンパカル　考へる。察する。
其の器(ウツハ)小なり。その人物が小さい。
心こゝに在らざれば　心がこゝにないなら。うはのそらであつたなら。
さがなし　善くない。不都合である。
はかなく　とりとめもなく。何といふこともなしに。
四の時　四季。
手のまひ云々　手足の置場がわからぬほど非常にうれしいこと。
まどし　貧し。
ほしいまゝ　思ふ存分。
知れらば　知つたならば。

一五　伊勢參宮

五十鈴川　イスズガハ　御裳濯川（ミモスソガハ）ともいふ。神宮の側を流るゝ川。

數を讀む　數をかぞへる。

千木　チギ　神社の棟の兩端の上にて交叉し高く空中にさし出た木。

堅魚木　カツヲギ　宮殿又は神社の棟木（ムナギ）の上に並列してゐる圓くて長い木。中央がふくらんで鰹節に似てゐるからの名。

跪く　ヒザマヅク

現　ウツツ　夢とも正氣ともつかぬやうな心の狀態。

敬虔　ケイケン　うやまひつゝしむこと。

すく〳〵　上に眞直ぐのびてゐるさま。

大廟　タイベウ　伊勢大神宮。初祖のおたまやの義。

御手洗川　ミタラシガハ　神社の近くを流れて、參詣者が口をそゝぎ、手水を使ひなどする川の意。

雅樂　ガガク　正しい音樂の意。日本の大昔からの歌舞・音樂及び中古に唐・三韓などから傳來した樂の總稱。

朝熊山　アサマヤマ　たゞがみて　拜して。

弓矢輌の音聞かぬ國　戰爭などのおこらぬ國。

「輌」トモ。弓を射る時左の臂にかけた革製の具。弦をあてて威容を示したものといふ。

可能性　カノウセイ　成りたち得る性質。

消極的　セウキヨクテキ　退き守る上にいふ。「積極的」の對照語。

皇御孫　スメミマ　天皇。天照大御神の御子孫。天孫。

積極的　セキキヨクテキ　進取を主として考へるのにいふ。

光明的　クワウミヤウテキ　常に前途に光明を認めてゆくこと。一大進展を遂げんとする狀態である。

一六　冬の日

慰めて　ナグサメテ

健かな　スコヤカナ　健康な、元氣のよい。

塵埃　ヂンアイ　ちり、ほこり。

垢　アカ　けがれ、ふこれ。

虛しい　ムナシイ　うつろな、實のなきこと。

一七　人生の急所

急所　キフショ　大切な點。かんじんな箇處。

支配されがち　常に自由にされる。

營々　エイエイ　ほねをりつとめるさま。

成就　ジャウジュ　仕上ること。出來あがる。

思ひが內に熟す　ある考へが十分に心の內に纏まる。

ためらはず　ぐづ〳〵せず。猶豫しないこと。

祝福される　神から幸福を與へられる。

擇ぶ所がない　少しもちがはない。

經驗する　實際にためし試みる。

味氣ない　アヂキナイ　つまらなく、なさけない。張合ひのない。

神祕　シンピ　普通の人智では容易に知り難いこと。

緒　イトグチ　はじまり。手がかり。

處置する　とりさばく。きまりをつける。

あてが外れる　目あてをとり失ふ。

一八　近江聖人の幼時

拂はまし　拂ひたいものである。

櫻狩　サクラガリ　山野に櫻を尋ねて花を見あるくこと。

霏々　ヒヒ　雪の盛んに降るさま。ちら〳〵。

凜冽　リンレツ　寒さのはげしいさま。

滿目蕭條　マンモクセウデウ　見渡す限り物さびしい。

暮靄朦朧　ボアイモウロウ　夕ぐれのもやがおぼろに立ちこめてゐること。

皚々　ガイガイ　雪や霜の白いさま。

踏みも習はぬ　あるきつけもしない。

彌增す　イヤマス　いよいよはげしくなる。

骨に徹る　ホネニトホル　骨にしみとほる。

深山路　ミヤマヂ

進退谷る　シンタイキハマル　途方にくれる。

そゞろに　何とはなしに。何故ともなく。

須臾　シユユ　しばらく。

衡門　カブキモン　冠木門。

築地　ツイヂ　土塀。

倚竹　シウチク　長い竹。

許多　キヨタ　あまた。

なまなかに　なまじひに。なまじに。

千例　センジン　一例は支那周尺の八尺。

沽む　ウルム。

屹として　キツトシテ　きちんと形をあらためて。

一九　幸福

宗家　ソウケ　本家。

サイレン　時報器。

生けるしるし　生きてゐるかひ。

あへらく　あうたこと。「らく」は「る」の延びたもの。

あをによし　奈良の枕詞。

口誦（クチズサ）んだ　心に浮かんだ詩歌をひとりごとのやうに歌ふ。

聖代の讃歌　めでたい御代をほめたゝえた歌。

二〇　歌御會始

拜誦　ハイショウ　つゝしんでよむ。

國家有事　コクカイウジ　國に變事のあること。

生々潑剌　セイセイハツラツ　生々とした活氣のあること。

御恒例　ゴコウレイ　仕きたりのこと、きまつたこと。

龍顏　リユウガン　天子のお顏。

披講　ヒコウ　讀んで廣めること。

背子　セコ　夫。

咫尺　シセキ　間近なこと。

二一　盲統夫

動悸　ドウキ

寢耳に水の　不意におこつた。

朴訥　ボクトツ　かざりけがなく、口數が少ないこと。

寡言　クワゲン　口數の少ないこと。

機智　キチ　その場合に應じて都合よく働く才智。

やをら　そろ〳〵。しづかに。

二二　茶の間

茶の間　チャノマ　家族が食事などする室。

地蟲　ヂムシ　黃金蟲科の昆蟲の幼蟲。いもむしに似た形をし、土中に棲む。

憂鬱　イウウツ　心が晴れ〴〵せぬこと。氣のおもいこと。ふさぐ。

山茶花　サザンクワ　山茶（ツバキ）科の常綠喬木。

芍藥　シャクヤク　牡丹屬の多年生の草。

二三　至誠

諺　コトワザ　いひならはした言。通俗の訓戒。

痛感　ツウカン　非常に强く感ずること。

十九世紀　西曆千八百年から西曆千九百年間。

科學　クワガク　理論立つた學問。

驚異的　キヨウイテキ　目をみはるやうな。

不屈不撓　フクツフゲウ　難儀に負けぬこと。

迫害　ハクガイ　苦しめなやます。

神祕　シンピ　神にのみ明かで人にうかゞひ知れぬこと。

合理的　ガフリテキ　理窟に合つて居ること。

淵源　エンゲン　物ごとの一番のもと。
悠久　イウキウ　年月の久しさこと。
宇宙　ウチウ　天地の廣い間。
托(タク)す　ことよせる。

二四　櫻井驛

荒くれ者　亂暴者。
申し聞ける　言聞かせる。
行々子　ヨシキリ　燕雀類の鳥。
黯然　アンゼン　悲しさのあまり心がくらくなるのにいふ。
死を必する　死を覺悟する。必死。
猶豫　イウヨ　ぐづ〳〵して決心しないこと。
狐疑　コギ　疑ひためらふこと。
疾風迅雷云々　シップウジンライ　事の急なるにいふ。急な風と共にはげしく雷鳴して、耳をおほひかくすひまがないやうに、にはかに攻めよせて敵の不意をつく。
杞人の憂　キジンノウレへ　とりこし苦勞。やくに立たぬ心配。
天空海濶　テンクウカイクワツ　空や海の如く非常にひろ〳〵としてゐること。
熟讀玩味　ジュクドクグワンミ　充分によく讀んでその意味を味はふこと。
お上　オカミ　主上。後醍醐天皇を申す。
綸言　リンゲン　みことのり。天子の御言葉。
指南車　シナンシャ　方向を指し示す車。よき方向に教へ導く意とする。
王佐　ソウサ　帝王をおたすけ申すこと。
資　シ　助け。參考材料。
甘言　カンゲン　口先だけの巧い言葉。
肝に鏤(エ)りつく　忘れぬやう充分に心にとどめておく。

二五　國史に還れ

功科表　コウクワヘウ　手がらを書いたもの。
平等觀　ビャウドウクワン　上下貴賤のない見方。
歷史觀　歷史の立場から見方。
把持　ハヂ　しつかりもつ。
緩急　クワンキフ　危急の場合。
剴切(ガイセツ)に　よく當てはまつて。
乾燥無味　カンソウムミ　うるほひがなくて興味もないこと。
固陋頑冥　コロウグワンメイ　かたくなでさとけないこと。
戀舊思想　レンキュウシサウ　昔のことを兎角よいと思ふ心。
保守退嬰　ホシュタイエイ　古きを守り、しりごみする。
詭激狂妄　キゲキキャウバウ　言行が中正を得ないてはげしいこと。
赤化主義　セキクワシュギ　過激主義。
自惚根性　ウヌボレコンジャウ　ひとりよがりの性根。
醉生夢死　スキセイムシ　爲す事なく徒らに一生を終ふ。

——(終)——

字音假名遣一覧

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・呉音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。）

イ

ゐ　ゐき　ゐん

尉・慰・韋偉緯煒違圍葦闈
幃・唯維帷惟委倭餧痿透
萎・胃渭謂蝟・爲・位・威・畏・彙・
遺
域閾
員韻隕殞・尹・允・院・筠

此ノ外ハ大抵いノ假名。

エ

ゑ　ゑい　ゑつ　ゑん

會繪・囘・廻・畫・穢・惠・慧・衞・
衞
越鉞・粤・曰
袁猿遠轅園・怨宛苑婉鴛
蜿・爰媛援猨瑗・垣・圓・寃

此ノ外ハ大抵ゑノ假名。

えう　えふ　よう

徭搖謠遙瑤飄・要腰・曜耀
耀・夭妖殀・幼拗窈・杳
葉
用俑涌蛹踊・容蓉溶熔鎔・
庸傭牖・膺鷹・擁壅癰孕・蠅

此ノ外ハ大抵やうノ假名。

オ

を　をく　をつ　をん

烏鳴塢・惡・汚
屋
越・膃
溫慍藴・袁園遠・怨苑・寃・穩

此ノ外ハ大抵おノ假名。

あふ　おう　わう

押狎・鴨・凹
應鷹・嘔毆歐嫗謳鷗甌・翁
蓊甕
王往枉汪旺尫皇凰・黃橫

此ノ外ハ大抵あうノ假名。

カ

くわ　ぐわ　くわい

化花貨訛靴・禾和科・果菓
課夥裹顆窠・華嘩譁・禍蝸
過渦・卦・火・戈・瓜・寡
瓦臥畫
會繪檜膾獪鱠・囘徊蛔廻・
傀槐魁瑰塊嵬・悔晦誨・灰
恢詼懷壞・快・怪・潰・乖

コ

かふ　がふ　こう

恰洽閤・甲匣狎胛岬・盍溘
嗑闔
合
孔吼・亙恆・口扣叩后垢逅
詬・苟拘鉤・溝構搆購媾篝
遘・工紅虹訌功攻貢槓鴻・
倥控・侯候喉猴・洪哄鬨・後・
弘・寇・厚・公・興・薨・肱・肯・恒
劫・業

（ゴ）

ごふ　くわう　ぐわう

光恍晃胱觥・皇惶徨煌篁
蝗遑・黃廣曠礦鑛壙黌・荒
慌・宏紘
轟

此ノ外ハ大抵かう（がう）ノ假名。

シ

しふ　じふ　しゆう　じゆう　ぢゆう

楫輯緝葺・習摺・集・拾・襲・執・
澁・濕
十什汁
終・衆・宗
從縦蹤・充銃・戎絨
（しゆう（じゆう）ハ（しう・じう）ト書クモ妨ナシ）
重・住・頭（ぢゆうハぢうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵しう（じう）ノ假名。

せう　ぜう　せふ　しよう　じよう　ぢやう　てう　でふ

小少抄鈔・肖梢宵霄消稍
硝逍銷誚哨蛸・召昭照詔
韶沼招紹・蕭簫嘯瀟・焦蕉
憔樵礁・笑・燒・椒
繞饒遶・擾
捷睫・妾接・渉懾慴
松訟頌鬆・鐘衝踵尰腫・升
昇陞・從慫縦蹤聳・悚竦・誦・
證・稱・勝承
丞蒸拯・乘剰・冗・繩・茸
丈仗杖・孃釀・定錠・場・娘
溺嫋・條・尿
帖・疊

此ノ外ハ大抵しやう（じやう）ノ假名。

（ジ）

ぢ　ぢき

持痔峙・治・地・尼怩・除
直

ト

たふ　とう　どう

荅塔搭沓踏納衲・榻
東棟凍・豆逗頭鬪痘登燈
鐙磴・剳・冬疼鼕・藤籐・謄騰・
等・投・偸・透・桶・統
童僮撞曈艟・同洞桐胴銅
筒・動慟

（ド）

此ノ外ハ大抵たう（だう）ノ假名。

ニ

にふ　にゆう

入
乳（にゆうハにうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵にうノ假名。

ねう　によう　ねふ

饒撓遶・尿溺
女
捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ノ

なふ　のう

納衲
農濃儂膿・能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ヒ

へう　べう　ひよう

表俵・票標漂嫖瓢飄剽・猋
飈豹・莩
苗描猫錨・秒眇渺・廟
馮憑冰

（ビ）

此ノ外ハ大抵ひやう（びやう）ノ假名。

ホ

はふ　ほふ　ばふ　ぼふ　ほう　ぼう

法・乏（漢音）
法・乏（呉音）
乏（漢音）
法乏（呉音）
奉俸捧・丰蚌・峯逢烽蜂鋒
縫蓬・朋崩鵬繃・封幇・豐鳳
矛袤・某謀・貿・眸・棒

（ボ）

此ノ外ハ大抵はう（ばう）ノ假名。

メ

めう

苗猫・妙

此ノ外ハ大抵みやうノ假名。

る。必死。
猶豫　イウヨ　ぐづ／＼して決心しないこと。
狐疑　コギ　疑ひためらふこと。

お上　オカミ　主上。後醍醐天皇を申す。
綸言　リンゲン　みことのり。天子の御言葉。
指南車　シナンシャ　方

歴史觀　歴史の立場からの見方。
把持　ハヂ　しつかりもつ。
緩急　クヮンキフ　危急の場合。

過激主義。
自惚根性　ウヌボレコンジャウ　ひとりよがりの性根。
醉生夢死　スヰセイムシ　爲す事なく徒らに一生

字音假名遣一覽

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・吳音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を掲げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
尉・慰・韋・偉・緯・違・圍・葦・闈・蔚・椲・唯・維・帷・惟・委・倭・餧・痿・透・萎・胃・渭・謂・蝟・爲・位・威・畏・彙・遺

ゐき
域・閾

ゐん
員・韻・隕・殞・尹・允・院・筠

此ノ外ハ大抵**い**ノ假名。

エ

ゑ
會・繪・回・廻・畫・穢・惠・慧・衞・

ゑい
衞・鉞・粤・曰

ゑつ
袁・猿・遠・轅・園・怨・宛・苑・婉・鴛

ゑん
蜿・爰・媛・援・猿・瑗・垣・圓・寃

此ノ外ハ大抵**え**ノ假名。

え
徭・搖・謠・遙・瑤・韓・要・腰・曜・耀

えう
耀・夭・妖・殀・幼・拗・窈・杳

えふ
葉

よう
用・俑・涌・蛹・踊・容・蓉・溶・熔・鎔・

庸・傭・臕・膺・鷹・擁・壅・癰・孕・蠅

此ノ外ハ大抵**やう**ノ假名。

オ

を
烏・嗚・塢・惡・汚

をく
屋

をつ
越・膃

をん
溫・慍・薀・袁・園・遠・怨・苑・寃・穩

此ノ外ハ大抵**お**ノ假名。

あふ
押・狎・鴨・凹

おう
應・鷹・嘔・毆・歐・嫗・謳・鷗・甌・翁

わう
蓊・甕・王・往・枉・汪・旺・尪・皇・凰・黃・横

此ノ外ハ大抵**あう**ノ假名。

カ（ガ）

くわ
化・花・貨・訛・靴・禾・和・科・果・菓

くわん
課・夥・裹・顆・窠・華・嘩・譁・禍・蝸・過・渦・卦・火・戈・瓜・寡・瓦・臥・畫

ぐわ
會・繪・檜・膾・獪・鱠・回・徊・蛔・廻・

くわい
傀・槐・魁・瑰・塊・嵬・悔・晦・誨・灰・

ぐわい
恢・詼・懷・壞・快・怪・潰・乖・外・

くわく
畫・劃・郭・廓・獲・穫・蠖・鑊・擾・

くわつ
霍・藿・擴・馘・活・括・闊・聒・滑・猾・豁・

ぐわつ
刮・括・闊・聒・滑・猾・豁・

くわん
月・串・患・綰・湲・完・莞・筦・貫・慣・官・宦・管・菅・棺・逭・館・喚・換・煥・渙・環・還・寰・鬟・鐶・勸・灌・歡・觀・鸛・讙・懽・驩・鑵・澣・寛・桓・款・冠・卷・盥・關・鰥・丸・紈・元・玩・頑・願

ぐわん
丸・紈・元・玩・頑・願

此ノ外ハ大抵**か**(**が**)ノ假名。

キ

きふ
及・吸・汲・級・笈・岌・給・翕・泣・急

きゆう
弓・穹・躬・窮・宮(**きゆう**ハ**きう**ト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵**きう**ノ假名。

ケ（ゲ）

けう
喬・僑・橋・嬌・矯・驕・徼・竅・梟・教・叫・

げう
堯・僥・澆・曉・驍・翹・

けふ
夾・俠・挾・狹・峽・頰・鋏・篋・愜・莢・怯・劫・協・脇・脅・

げふ
業・鄴・

きよう
共・供・拱・恭・龔・恐・蛩・跫・鞏・凶・

ぎよう
兇・匈・恟・胸・輿・矜・兢・

凝・

此ノ外ハ大抵**きやう**(**ぎやう**)ノ假名。

コ（ゴ）

かふ
恰・洽・閤・甲・匣・狎・胛・岬・盍・溘・嗑・闔・合・

がふ
合・

こう
孔・吼・亙・恆・口・扣・叩・后・垢・逅・

ごふ
詬・苟・拘・鉤・溝・構・搆・購・媾・篝・

くわう
遘・工・紅・虹・訌・功・攻・貢・槓・鴻・

ぐわう
倥・控・硬・候・喉・猴・洪・哄・鬨・後・

弘・寇・厚・公・興・薨・肱・肯・恒・

勘・業・

光・恍・晃・胱・皇・惶・徨・煌・篁・

蝗・遑・貢・廣・曠・礦・鑛・壙・黌・荒・

慌・宏・紘・

轟・

此ノ外ハ大抵**かう**(**がう**)ノ假名。

シ（ジ）

しふ
楫・輯・緝・葺・習・摺・集・拾・襲・執・

じふ
澁・濕・

しゆう
十・什・汁・

じゅう
縱・蓼・宗・

ぢゆう
從・縱・蹤・充・銃・戎・絨・

（**しゆう**(**じゅう**)ハ(**しう**・**じう**)ト書クモ妨ナシ）

重・住・頭(**ぢゆう**ハ**ぢう**ト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵**しう**(**じう**)ノ假名。

せう
小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍・

ぜう
硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔・

せふ
韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉・

しよう
憔・樵・礁・笑・燒・椒・

じよう
繞・饒・遶・擾・

ぢやう
捷・睫・妾・接・渉・懾・慴・

てう
松・訟・頌・鬆・鐘・衝・踵・腫・升・

でふ
昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・悚・竦・誦・

じう
證・稱・勝・承・

ぢう
丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・茸・

ぢう
丈・仗・杖・孃・釀・定・錠・場・娘・

溺・嫋・條・尿・

帖・疊・

此ノ外ハ大抵**しう**(**じう**)ノ假名。

ぢき
持・痔・峙・治・地・尼・怩・除・

ぢく
直・

ぢつ
軸・舳・竺・蚓・忸・

ぢよ
昵・

ぢん
女・除・

陣・塵・

此ノ外ハ大抵**じ**ノ假名。

ス（ズ）

づ
豆・逗・頭・闘・途・徒・

此ノ外ハ大抵**ず**ノ假名。

ソ（ゾ）

さふ
挿・匝・

さう
雜・

そう
窗・總・聰・葱・偬・宗・綜・踪・淙・

崇・曾・僧・增・層・憎・贈・奏・湊・輳・

叟・搜・艘・瘦・嗽・漱・嗾・簇・宋・走・

叢・藪・送・

此ノ外ハ大抵**さう**(**ざう**)ノ假名。

チ

ちふ
蟄・

ちゆう
中・仲・冲・忠・衷・注・柱・註・駐・誅・

蛛・厨・躕・蟲(**ちゆう**ハ**ちう**ト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵**ちう**ノ假名。

てふ
蝶・喋・諜・諜・渫・帖・貼・

てう
朝・潮・嘲・兆・銚・挑・眺・跳・窕・鼎・

凋・調・彫・鯛・超・迢・貂・髫・弔・鳥・

釣・肇・鑿・趙・

冢・塚・徵・懲・重・澄・寵・

此ノ外ハ大抵**ちやう**ノ假名。

ト（ド）

たふ
答・塔・搭・沓・踏・納・衲・榻・

とう
東・棟・凍・豆・逗・頭・鬪・痘・登・燈・

鐙・磴・劑・冬・疼・氅・藤・籐・謄・騰・

等・投・偸・透・桶・統・

どう
童・僮・撞・瞳・艟・同・洞・桐・胴・銅・

筒・動・慟・

此ノ外ハ大抵**たう**(**だう**)ノ假名。

ニ

にふ
入

にゆう
乳(**にゆう**ハ**にう**ト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵**にう**ノ假名。

ねう
饒・撓・遶・尿・溺・

によう
女・

ねふ
捻・

此ノ外ハ大抵**にやう**ノ假名。

ノ

なふ
納・衲・

のう
農・濃・儂・膿・能・

此ノ外ハ大抵**なう**ノ假名。

ヒ（ビ）

へう
表・俵・票・標・漂・嫖・飄・飄・剽・猋・

べう
飈・豹・莩・

ひよう
苗・描・猫・錨・秒・眇・渺・廟・

馮・憑・冰・

此ノ外ハ大抵**ひやう**(**びやう**)ノ假名。

ホ（ボ）

はふ
法・乏(漢音)

ほふ
法・乏(吳音)

ばふ
乏(漢音)

ぼふ
法・乏(吳音)

ほう
奉・俸・捧・丰・蚌・峯・逢・烽・蜂・鋒・

ぼう
縫・蓬・朋・崩・鵬・繃・封・幇・豐・鳳・

矛・袤・某・謀・貿・眸・棒・

此ノ外ハ大抵**はう**(**ばう**)ノ假名。

メ

めう
苗・猫・妙・

此ノ外ハ大抵**みやう**ノ假名。

モ

もう
蒙・朦・濛・艨・

此ノ外ハ大抵**まう**ノ假名。

ユ

いふ
邑・悒・揖・

ゆう
雄・勇・熊・裕・融・

此ノ外ハ大抵**いう**ノ假名。

リ

りふ
立・笠・粒・

りゆう
龍・隆(**りゆう**ハ**りう**ト書クモ妨ナシ)

此ノ外ハ大抵**りう**ノ假名。

レ

れう
寮・療・遼・燎・僚・瞭・了・料・聊・寥・

れふ
獵・鬣・

りよう
凌・菱・稜・陵・綾・龍・

此ノ外ハ大抵**りやう**ノ假名。

ロ

らふ
蠟・朧・蔦・

ろう
籠・瀧・朧・瓏・聾・隴・饗・樓・僂・螻・

鏤・弄・陋・漏・

此ノ外ハ大抵**らう**ノ假名。

ヰ

す・つ・ゆ・る等ノ**う**列ノ音ノ下ニ來ル**い**ノ發音ハ**ゐ**ノ假名デアル

水(すゐ)・追(つゐ)・隨(ずゐ)・唯(ゆゐ)・類(るゐ)等

此ノ外ハ**い**ノ假名

愛(あい)・英(えい)・明(めい)・清(せい)等

女子國文新編（第三版）全十冊奥附

自卷一
至卷十

定價
各 金五拾八錢

大正十三年十月二十七日 印刷
大正十四年二月九日 訂正再版 印刷
大正十四年二月六日 訂正再版 發行
昭和五年九月二十九日 第二版 印刷
昭和五年九月二十六日 第二版 發行
昭和六年二月一日 第二版訂正再版 印刷
昭和六年二月一日 第二版訂正再版 發行
昭和十年八月二十六日 第三版 印刷
昭和十一年一月十九日 第三版訂正再版 印刷
昭和十一年一月十九日 第三版訂正再版 發行
昭和十一年一月十四日 第三版訂正再版 發行

不許複製

著作者 垣内松三

東京市神田區美土代町十八番地
株式會社 文學社
代表者 小林竹雄

發行兼印刷者

東京市本郷區弓砂町三十六番地
日東印刷株式會社

印刷所

發兌

東京市神田區美土代町十八番地
電話神田三五一一番
振替口座東京三八七八番
株式會社 文學社

關西一手販賣所

大阪市西區靱北通り二丁目
電話土佐堀一五二三番
振替口座大阪七四三番
株式會社 盛文館

一上

粟屋泰子